

日本女性指導者育成支援事業

2012 年度報告書



National Federation of Business and Professional Women's Clubs of Japan

特定非営利活動法人日本 BPW 連合会

BPW は、 Business and Professional Women の略で、日本 BPW 連合会は、働く女性 たちの国際組織 BPW International 加盟の民間組織です。

- 働く女性の利益を促進し、女性の社会的地位と職業水準の向上をはかるとともに、国内 および国外の働く女性の親交と理解を深め、世界平和に寄与することなど、下記の項目 を主な目的としています。
- 職業人としての会員自身を高める研鑽をすると共に、それを会員だけのものにせず、広く社会に情報として提供する活動をします。
- 能力と意欲があるのに、それを発揮する機会に恵まれないと嘆く女性がいない社会を作る活動をします。
- 賃金格差や昇進格差に悩む女性がいない社会を作る活動をします。
- 働き続けたいのに結婚、育児、介護その他の理由で仕事を諦めなければならない女性がいない社会を作る活動をします。
- 若い女性たちの頑張る意欲を、世界的視野を含めてサポートする活動をします。

2007年、アメリカ、ボストンにあるフィッシュ・ファミリー財団と、シモンズカレッジのマネージメントスクールの主催でスタートした事業、JWLI (Japanese Women's Leadership Initiative)。日本 BPW 連合会は、2009年から日本側のパートナーとして、研修生の応募と派遣、研修生のフォローアップ、JWLI フォーラムの開催など、日本での業務に関わっています。

特定非営利活動法人日本 BPW 連合会

連絡先・所在地

〒151-0052 東京都渋谷区代々木 2-21-11 婦選会館ビル 303 TEL 03-5304-7874 FAX 03-5304-7876 http://www.bpw-japan.jp

目次

日本 BPW 連合会について ······表 2
目次
巻頭メッセージ
フィッシュ・ファミリー財団理事 厚子・東光・フィッシュ氏2
シモンズ経営大学院教授パトリシア・デイトン氏 \cdots
日本 BPW 連合会理事長 松原敏美氏 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
2012 年度 JWLI 研修プログラムカレンダー8
研修内容報告
オリエンテーション(9月6日)9
ウェブ・オブ・ベネフィット(9 月 6 日 -7 日) $\cdots\cdots\cdots 11$
女性のための戦略的リーダーシップ(SLW)セミナー(9 月 10 日 -14 日) $\cdots \cdots 15$
アジアン・タスク・フォース・アゲインスト・ドメスティック・バイオレンス(ATASK)
(9月17日-19日)25
ウィメンズ・ランチ・プレイス(9月20日)30
MCML コンサルティング・サービス, LLC(9 月 20 日)32
ディ・イタリアン・ホーム・フォー・チルドレン(9 月 21 日)34
グローバル・ギヴィング(9 月 21 日)36
エリス・メモリアル(9月24日-28日)38
ボストン財団(10月1日)49
フィッシュ・ファミリー財団(10月1日)49
English Report (from weekly journal by Shima Fumimoto) · · · · · · · 54
2012 JWLI 6 期フェロー研修報告会 ··························64
JWLI 2013 度 研修募集要項 ·······表 3

MESSAGE TO THE 2012 JWLI FELLOWS

Congratulations on the completion of 2012 JWLI fellow program. We are very proud of your participation and accomplishment. You must feel confident and fulfilled after extraordinary learning and inspirational experience during four weeks in Boston.

I would like to remind you that the vision of JWLI including:

- → taking charge of your own life and dreams,
- → making a difference in the community based on your dream vision,
- ♦ having courageous to take actions and to make your dreams comes true, and
- ♦ doing good deeds to others and communities

I understand that no matter how much you're inspired and motivated with new ideas and experiences from Boston, it is not easy to take action once you return to Japan, due to an invisible cultural barrier that resists innovation and change.

However, after 3/11, Japan's interest and desire to support the people and communities in Tohoku has created a momentum for change. Because of delays in decision making political instability, people lost trust in the government. While more people do not want to depend on the Government, the emerging non-profit community is becoming reliable resources and providing safety net for the people who need help. The idea of "Doing good to others" and "making a difference" are now an important part of civil society.

Therefore, It is the time for JWLI fellows to" stand up and speak up" for TAKE AN ACTION. There are so unmet social needs that are waiting for your initiative to make a difference even in very small way. Be courageous and remember what you learned and what motivated you in Boston. You can show your leadership, compassion and strengthen.

Lastly, please remember to "enjoy" your activities and projects. When projects are successful, tell yourself and others "a good job." If the project is not fun it will not succeed or continue for long time.

It is exciting, new chapter of your life is about to begin. Good luck and best wishes!!!

Atsuko Fish Founder of JWLI program December 20, 2012

2012 JWLI フェローの皆様へのメッセージ

2012年のフェローシッププログラムの修了おめでとうございます。皆様の参加と修了を誇りに思います。きっと、皆様もボストンでの 4 週間の素晴らしい学びと感動的な経験の後で、自身と充足感に満ちていると思います。

此処で、もう一度、JWLIのヴィジョンを確認したいと思います。

- ◆ あなた自身の生き方と夢を主導し、
- ◆ あなたのドリームヴィジョンに基づいた社会変化をおこし、
- 令 行動を起こすための勇気を持ち、あなたの夢の実現を実現させ、
- ◆ 周りの人々やコミュニティに対して良い行動を起こす事

ボストン研修からの新しい発想や、経験で皆様がインスパイアされ、モチベートされても、 日本に帰ってくると実際に行動に移す事は、簡単ではない事を、理解しています。それは、 革新や変化に対しての見えない文化の壁があるからでしょう。

しかしながら、3.11 後、被災された東北の人々やコミュニティを支援するための日本の興味や希望が、社会変革の契機をもたらしました。それは、政治的決断の遅れが、人々の政府に対する信頼を失わせているからです。より多くの人々が政府に依存する事を望まなくなっている一方で、台頭してきている非営利組織が、助けを求める人々にとってのセーフティーネットをもたらす信頼のおける"頼みの綱(リソース)"となってきています。このような発想"他の人々に良い事を行う事""ディフェレンス(違い)をつくること"は、いまや市民社会にとって重要な役割となっているのです。

したがって、いまこそ JWLI のフェローにとっては、Taking Action の為に"立ちあがり、発言する"その時なのです。たとえ小さな方法でも、社会変化の為にあなた方のイニシアティブの行動を待っている社会のニーズは数多くあります。ボストンで学び、モチベートされた事を常に忘れず、勇気を持って下さい。あなた方はリーダーシップ、想いやり、そして強さを示す事ができるのです。

最後に、あなた方の活動とプロジェクトを"楽しむこと"を忘れないでください。そして、 プロジェクトが成功した時は、あなた自身や他の人に"Good Job"と伝えましょう!もしも プロジェクトが楽しくなければ、それは成功しませんし、または長くは続きません。

ワクワクするような、あなたの人生の新しい章が始まろうとしています。幸運を祈ります。

2012 年 12 月 20 日厚子東光フィッシュJWLI プログラム創設者フィッシュ・ファミリー財団理事

Message to the JWLI Fellows 2012 Program

The sixth year of the Japanese Women's Leadership Initiative is now complete and we at Simmons continue to be proud of the program as it continues to have the opportunity to host outstanding Japanese women with leadership potential. The four selected Fellows for the 2012 program once again represented a wide variety of interests and experience, but all brought with them the common desire to learn about the nonprofit sector and leadership and then to return to Japan committed to working for change in Japanese society.

It is also notable to see how well the collaboration of many partners has worked in order to provide the strong and successful JWLI program. The partners include the Fish Family Foundation, the Simmons School of Management and BPW-Japan, which each partner taking an important role. Further, in the US based part of the program, we have host organization partners and in 2012 added two other site visits that enhanced the value of the program. The special training, in which the Fellows participate, *Strategic Leadership for Women*, continues to provide the Fellows with opportunities to explore and consider their personal leadership capacity, an important outcome of the program.

At this important time in Japan, there are new opportunities for Japanese women to take initiative and become leaders in the nonprofit sector to help bring about social and community change in their country. We are proud of being a part of this movement.

Plans are now beginning for program planning and recruitment of the Fellows for the 2013 program and we look forward to another exciting and valuable program.

Patricia Deyton

Faculty Director, Center for Gender in Organization and Professor of Practice Simmons School of Management

2012 JWLI プログラム フェローへのメッセージ

JWLI 第6期のプログラムが終了し、シモンズの私達は、リーダーシップの可能性に満ちた素晴らしい日本女性をホストさせていただきました事に、誇りを持ち続けています。

2012 年プログラムに選考された 4 名のフェロー達は、広い範囲の経験や興味を持っていますが、同時に非営利の分野や、リーダーシップについて学び、帰国後は日本での社会変化の為に仕事をするという共通の願望や考え方を持っています。

この JWLI プログラムを成功させる為に、フィッシュ・ファミリー財団、シモンズマネージメントスクール、BPW Japan 等の、多くの組織や人々の協力があった事も注目すべき事です。

さらにボストンでは、毎年フェローを支援、指導する非営利分野の多くのホスト組織、そして **2012** 年度からは、新しく二つの組織が加わり、プログラムの価値をさらに高める事が出来ました。また、フェローが毎年参加するシモンズでの「女性管理者の為の戦略的リーダーシップ」のトレーニングは、フェロー達に、自らの個人的なリーダーシップ能力の可能性を開発し、成果をもたらしてくれる重要なプログラムです。

震災後の現在の日本において、社会やコミュニティを改善するために、日本女性達は、非営利の分野で指導力を発揮する事のできる新しい可能性に満ちていると思われます。私達は、この時代の動きに、日本女性が学びを通して貢献する事が出来ることに誇りを持っています。

私達は、**2013** 年の新しいフェローの為に、新しいプログラムの計画や、フェローの募集を計画しています。ワクワクするような、価値の高いプログラムを大いに期待しています。

パトリシア・デイトン シモンズ経営大学院 (マネージメントスクール) ジェンダー研究所所長および教授



第6期JWLIフェロー報告書発刊に寄せて

平成 24 年 12 月

第6期フェローの皆様の報告書を発刊できることは、私達の大きな喜びです。無事に充実した研修を終えられましたこと、誠におめでとうございます。

平成 24 年 12 月 16 日に行われた衆議院議員選挙の結果、自民党が大勝し、政権を担うことになりました。しかし、政権をどの政党が担当しようと、現実に存在する問題を解決しなければならないことは同じです。一般会計歳出総額 90 兆円に占める国債費は 22 兆円ですから、その割合は 24.3%にも達しています。また一方で、2012 年で団塊の世代が退職期を迎え終え、多数の人がこれから支える側から支えられる側に移動します。この事態を背景に、経済をインフレに導き、そのうえでデノミを行えば、実質的な増税と借金(国債)返済を一挙に解決できるという乱暴な議論まで一概に冗談として済まされない昨今です。いずれにしても、国民に大きなしわ寄せが及ぶことは目に見えています。それが急激なものか、長い年月をかけた緩やかなものかは別にして、私達「市民」の側も、覚悟をしなければなりません。これまでのように手厚いサポートが国から期待できないことを自覚して、市民として、地域社会を守り、人権や生活の質を守るために、どう行動すべきなのかを考え、行動する必要があります。

平成 24 年 11 月 10 日に同窓会が自主的に開催された報告会に参加させて頂いて、頼もしさと皆様の将来が楽しみだと思わせて頂けた嬉しさを噛みしめました。その時のスピーチでも申し上げたことですが、日本の「これから」は、市民の手に委ねられています。正に NPO、NGO における女性リーダーの研修を受けられた皆様は、私達の希望の光と言っても過言ではありません。

フェローの皆様のサポーターとして日本 BPW 連合会は、皆様の活躍を心から期待申し上げております。

日本 BPW 連合会 理事長 松原敏美



On the Occasion of Publication of the 6th JWLI Fellowship Program Report

December, 2012

It is our great pleasure to be able to issue the 6th JWLI Fellowship Program Report. Congratulations on your completion of the fellowship program with a sense of fulfillment.

In Japan, the election of members of the House of Representatives was held on December 16, 2012, and the Liberal Democratic Party has swept to Power. Regardless of the change of regime, we still have a mission to resolve existing problems. National debt service cost of 22 trillion yen constitutes 24.3% of the total amount of 90 trillion yen general account expenditure. Meanwhile, the baby boomer generation has reached to retirement age, and people on the side to be supported by them now shift to the side to support others. These factors results in inflation, and then redenomination can help to solve issues on both substantive increase in tax and the payment of (public) debt all together; such an extreme discussion could not be necessarily received even as a joke these days. In any case, it is matter of time before the public is left to bear the huge burden, which will happen rapidly or slowly over time. Anyway, we as "citizens" should be prepared for that; we have to be well aware that we could not expect conventional support with great generosity any longer, and as citizens, we need to think how to act and put in practice so as to protect our community, human rights and quality of life.

When I participated to the public briefing session on November 10, 2012 held by Alumni, I relished the happiness of feeling the confidence in these fellows and great expectations in their future. As I mentioned in my speech there, the "future" of Japan is left in hands of citizens. It is not too much to say that you fellows, who completed the leadership program for women in NPO and NGO, are truly the hope for us.

As a supporter of JWLI fellows, BPW Japan wishes you all the great success in the future.

BPW Japan Toshimi Matsubara, President

2012 年度 JWLI 研修プログラムカレンダー

DRAFT JWLI Fellows Program Calendar September 2012

SUNDAY	MONDAY	TUESDAY	WEDNESDAY	THURSDAY	FRIDAY	SATURDAY
2	3- Labor Day	4	5	6	7	8
				Web of Benefit	Web of Benefit	
	Fellows Arrive	Fellows Arrive	10 AM - 3 PM ORIENTATION FISH FAMILY FDN, HOST ORGS, CGO, CI	10 AM - 4 PM Dream Proposal Empowerment	10 AM - 3 PM Starting a grassroots nonprofit	Free
	Aug. 31- 11:30 AM R. Tanioka 	11:20 AM N. Takahashi L 008	at Simmons School of Mgmt. Goal Setting Fellows' Presentations	Personal Growth	3 PM	
	7:25 PM K. Sakakibara UA302	5:50 PM S Furnimoto AA17+90	6:30 PM WELCOME DINNER RSH FAMILY FDN, HOST ORGS CGO, CI Fugskyu Japanese Cuisine Brookline 1280 Beacon Street		W eekly Meeting with Patricia	
9	10	11	12	13	14	15
	Strategic Leadership for Women Simmons School of Mgmt	Strategic Leadership for Women Smmons School of Mgmt	Strategic Leadership for Women Smmons School of Mgmt	Strategic Leadership for Women Simmons School of Mgmt	Strategic Leadership for Women Smmons School of Mgmt	15
Free 10 AM						Free
National Ovarian Cancer Coalition Massachusetts Chapter's 14th Annual 5K	9:30 AM - 7 PM Laying the Foundation Exploring Leadership Potential Peer Mentoring	8 AM - 8:30 PM Communication Grategies Leading Teams Faculty Coaching Leadership Team Conversations	8 AM - 6 PM Gender and Leadership Networking Leadership Support Teams	8 AM - 8 PM Leading Teams Power and Persuasion Reception Dinner and Graduation Ceremony	8 AM -1 PM Strategic Paths to Leadership Program Reflections and Closing 1:30 PM	
Run/W alk to Break the Slence on Ovarian Cancer (Fellows participating)					Weekly Meeting with Patricia	
16	17	18	19	20	21	22
	ATASK	ATASK	ATASK		Italian Home for Children	
Free	9 AM- 5PM	9 AM- 8PM	8AM-2:30PM	9AM-11:30 AM: Women's Lunch Place	10AM-12PM: Italian Home for Children	Free
	ATASK history & phases of development:	Current ATASK programs	Innovation and Growth	12 PM: Lunch at Simmons	12:30 PM: Lunch at Simmons	
	Governance of non-profits:	Attend management meeting	Annual planning retreats	Dialogue/Discussion with Mrs. Fish- Future		
	Lunch with Board members Financial sustainability	Community-based advocacy program Life skills/ESOL	ATASK's strategic priorities 2013-2018 Benefits of collaboration & partnerships	Women's Leadership in Japan Atsuko Fish, Fish Family Fdn, JDRF	1:30PM: Women's Role in American NGOs and the Future of Japan	
	Development & marketing	Asian Women's Empowerment	New program models/business plans	Access to the first term of th	Mari Kuraishi, CEO, GlobalGiving	
	Meet with foundation program officer	Legal advocacy	Wrap-up	2PM - 5PM: MCML presentation	at Simmons School of Mgmt.	
		Women's management styles Education and outreach	5-6:30PM (optional) Cambridge Community Foundation Board	at Simmons School of Mgmt.	3:30 PM: W eekly Meeting with Patricia	
		Residential shelter	Meeting (attend with Linda Chin)		ooo i iii ii oo ay ii oo ah gaaraa	
SUNDAY 23	MONDAY 24	TUESDAY 25	W EDNESDAY 26	THURSDAY 27	FRIDAY 28	SATURDAY 29
20	Ellis Memorial	Elis Memorial	Elis Memorial	Elis Memorial	Ellis Memorial	25
Free	9:30AM - 3:30PM	7:30 AM Red Cross Breakfast	10 AM - 4:30 PM	9AM- 3 PM	9AM-11AM	Free
	Meet with CEO		Adult Day Health	Daily meeting with Leo	End of Week Meeting with Leo	
	Tour the programs Capital campaigns	10AM-3:30PM Early Education Program	Project Place	Family Justice Center	2 :30 PM	
	Review the week's schedule.	Lony Loucation (10gram	Tojou Flaue		W eekly Meeting with Patricia	
	F B14 - 6B7	Daily meeting with Leo	Daily meeting with Leo	5:30 - 7:30 PM		
	5 PM-8PM Grand Opening of new Ellis Memorial	After school programs		"Nonprofit Management" Web Conference at Simmons		
	Building			School of Mgmt.		
	58 Berkeley Street	5:30PM- 10 PM Red Sox Game Fenway Park				
30	1-0 ct	2	3	4	5	6
	Fish Family Foundation					
Free	8:30 AM - 10 AM		Fellows Depart	Fellows Depart	Fellows Depart	
	CLOSING RECEPTION The Boston Foundation	10 AM - 12:30 PM Closing Meeting with Patricia	1:10 PM N. Takahashi L007	6:25 AM K. Sakakibara UA1433	1:10 PM R. Taniokai L007	
	11AM-4PM Visit FFF Offices				Oct. 7- 3:50 PM S Fumimoto AA5921	
	Philanthropy	1 PM CLOSING LUNCHEON				
	Tref Borden, Exec. Director, FFF	FISH FAMILY FDN, HOST ORGS, CGO Petit Robert Bistro				
	Lunch	468 Commonwealth Avenue, Boston				
L				<u> </u>	<u> </u>	

文責:榊原清乃

研修日:2012年9月6日(木)

WOMEN'S LEADERSHIP INITIATIVE (JWLI) オリエンテーション SIMMONS SCHOOL OF MANAGEMENT (シモンズ・スクール・オブ・マネジメント) にて



THE FISH
FAMILY
FOUNDATION

目標:

- 研修の目標設定
- フェローによる研修のプレゼンテーションを行う

研修初日、シモンズ大学にてオリエンテーションに臨む。フィッシュ・ファミリー財団のフィッシュ・厚子さん、フィッシュ・ファミリー財団ディレクターTref Borden さん、日本人スタッフの Kozue Sawame さん、シモンズ大学からPatricia Dayton 教授、Cynthia Ingols 教授、そして研修期間中、私たちのサポートをしてくれる Lauren Walleser さんが参加。



まず、フェローそれぞれが自己紹介、及び今回の研修で学びたいことについてプレゼンテーションを行う。続いて、フィッシュ・厚子さんから、彼女自身のこれまでのキャリア形成と JWLI をスタートさせた背景についての話を伺う。

1983 年、厚子さんは、43歳の時にボストンに家族で移住し仕事を得るのであるが、それまで、アメリカで学位を取得したことも就労経験もなく、更に幼い子どもがいるという環境で仕事を得ることは、日本では勿論のこと、アメリカでも厳しい現実が立ちはだかる。しかしながら、厚子さんは諦めることなく、何度も当時のマサチューセッツ州知事に対して手紙を書き、日本とアメリカの架け橋となるような文化交流プログラム等を提案したという。その結果、知事自らが、厚子さんのプロポーザル(提案書)実現のために、予算、秘書、PC等を用意してくれたのである。まさにアメリカン・ドリームである。日本では、このようなことは皆無に等しいが、アメリカでは、確固たるヴィジョン、戦略を持ち、信念を持っていれば、立場や年齢、経歴が不利であろうとも、夢を叶えることが出来るという。

厚子さんは、その後 JICA (国際協力機構) と協力してアフリカの子ども達のための MSH (Management Sciences for Health 公衆衛生) 活動に7年間携わることになるのだが、この時の経験が、東日本大震災での救援活動に大いに役立ったという。地震から3日後の3月14日には、10人の医師をアメリカから東北へ送りこみ、更に自らも現地に入り、被災地の状況を把握し

た上で復興支援活動を開始。今も継続して精力的な復興支援 を行っている。

JWLI のプログラムをスタートさせるにあたっても、厚子 さんは、何度も色々なチャンスのドアをノックしてきたとい う。アメリカでは、建国の歴史的背景もあり、市民が自分た



ちの社会を自分たちの力で変えていくフロンティア精神がある。世界で最も NPO 活動が進んでいるアメリカで、日本の女性達に、情熱、行動力、DO IT YOUUSELF 精神に接して学んでもらい、日本の社会変革のためのリーダーになってほしいという思いが芽生え、JWLI 研修プログラムを発案、プログラムの日本側のスポンサーを探した。しかし、初めの 5 年間は、日本の企業が当時 NPO 分野に明るくなかったこと等もあり実現できなかった。しかし厚子さんの諦めない精神で提案活動を続けること 6 年目にして、2006 年にプログラムがスタートする。オリエンテーションのはじめに、フィッシュ・厚子さんの話を直接聞いて、私たちフェローは、JWLI で学ぶ意義をあらためて見つめ直すことができたように思う。

次に、シモンズ大学側の責任者である、Center for Gender in Organizations(ジェンダー研究センター)のディレクター、Patricia Deyton 教授からは、アメリカの歴史そのものが NPO 精神であること、アメリカの NPO の理事会は外に開かれている点等、アメリカの NPO で学ぶ意義についての説明を受ける。これからの研修期間中、私たちフェローは、毎日の研修での学び及び体験、感じたことを英語で記録し、教授に報告すること、週報を英語及び日本語で作成すること等の課題が与えられた。続いて、アメリカの企業の女性管理職たちと共に受ける Strategic Leadership for Women(女性のための戦略的リーダーシップ論)の責任者、Cynthia Ingols 教授から、今年の参加者は定員一杯の 27 名で、NASA やマイクロソフト、病院、市役所などからの参加者が主であること、教授自身も途上国の女性を支援する京都の NPO 活動(「ReBorn Kyoto」)に関わっていること等の説明と紹介を受ける。

2012年9月6日(木) 18:30-

Welcome Dinner 歓迎夕食会

Fish Family Foundation Hosted organizations, CGO, CI at Fugakyu Japanese Cuisine Brookline (1280 Beacon Street)

フィッシュ・ファミリー財団のホストにて、JWLIプログラムに関連する NPO、シモンズ大学関係者が一同に日本食レストランに集まり、6期生のフェローのための歓迎夕食会を開催いただく。まだボストンに到着して、1、2日しか経過しておらず、オリエンテーションを終えたのみの状態だったためか、私たちフェローはお店に到着したときは緊張していたが、フィッシュ・ファミリー財団のラリーさんから、それぞれに1冊の本と一輪の素敵なバラをプレゼントいただき、それぞれの方々との話も弾み始めた。また私達

フェローからは、これからお世話なる皆様へ、感謝の気持ちとして日本からの土産品を渡して、

喜んでいただけた。研修初日に、皆さん忙しいさなか、フィッシュ・ファミリー財団、シモンズ大学および研修を複数日受け入れてくださる NPO 代表のすべての方々が出席されていて、あらためて、研修先の皆様

の温かい気持ちにふれることができ、これからはじまる研修にベ ストを尽くそうと思った夕食会であった。

文責:榊原清乃

研修日: 2012年9月6日(木)-7日(金)

WEB OF BENEFIT

(ウェブ・オブ・ベネフィット)

Executive Director: Ms. Johanna Crawford

www.webofbenefit.org



活動内容と実績

2004年に設立されたボストンエリアにおけるドメスティック・バイオレンス (DV)、つまり、 家族や親密な関係にある人から体的・精神的・経済的苦痛や暴力を受けた被害者女性の自立を 支援する NPO である。

DV 被害者の女性達が、暴力から逃れ、安全なところへの解放と自立を促し支援する。

今日までに、WOB は、62 万 5 千ドルの助成金を得て、その助成金を当機関の利用者へ、住居や教育、コンピューター、育児費用、交通費、健康診断やスモールビジネスの起業のための資金提供を行ってきている。この自立支援助成金を活用するためには、Web of Benefit とともに利用者達が自分自身のゴールと夢を認識し明確にすることが必要となる。また、利用者は、他の 3 人の利用者を援助することを求められており、この行動のことを、当機関では"ペイフォワード"精神と呼んでいる。

Web of Benefit のゴール:

- ◆ 当機関の利用者の環境を、安全→安定→自立→経済的自立へと導きサポートすること
- ◆ 利用者が、できるだけ大きな夢を描き、夢実現のための確実なステップ設定のために助言すること
- ◆ ゴール達成のために、エージェンシー、財団、企業、個人とのパートナーシップの新規構 築や強化を行うこと

ソーシャルメディア Social Media:

http://www.facebook.com/pages/Web-of-Benefit/95815020100?ref=ts&sk=wall

http://twitter.com/#!/Web of Benefit

http://www.webofbenefit.blogspot.com/

研修内容

目標:

- Dream Proposal (ドリームプロポーザル:夢の提案)を作成する
- 各人の価値ある行動能力、リスクを取って行動する力、エンパワーメント力を高める
- DV や DV 関連の社会起業家の理解を深める
- 草の根活動を行う NPO の運営手法を学ぶ

1 月 目

NPO でのハンズオントレーニングの初めの団体は、ドメスティック・バイオレンス (DV) 被害者の支援組織である Web Of Benefit(WOB)。研修の朝、ホテルまで代表の Jo さんが車で迎えに来てくれた。会うなり挨拶のハグ、そして飛び切りの笑顔で "Have Fun!!"と投げかけてくれ、研修初日の緊張感が解きほぐされる。最初の数秒で、人の気持ちを惹きつけることができることも、リーダーの重要な要素だと実感する。



Jo さんの車に同乗し 30 分ほどで Jo さんの自宅兼事務所に着く。自宅をオフィスとして働く自分にとっても参考になる。 リラックスできる空間とレイアウトで、研修もリラックスした雰囲気ではじまる。 壁には、"If you can dream it, you can do it", "If you keep on believing, the dreams that you wish will come true", "Be bold in the dream for yourself"などの言葉が書いてある色紙、フォトフレーム等が、家族の写真と共にたくさん飾られていて、この空間にいると夢が広がる気持ちになる。

WOB での日常の業務は Jo さん一人(あとは、週に 10 時間のインターン 2 人のみ)で切り盛りしている。支援を希望する女性と面談した上で、最終決定を JO さんが出すのであるが、CNNの今年の顔とも言える「Heroes」(ご参照:CNN ヒーローズ日本語サイトhttp://www.jctv.co.jp/cnnj/heroes/)の一人に選ばれたこともあり、支援を希望する女性が増え続け、この一年間で 425 人から 1100 人に増えた。多い時には 1 日に 10 人を超える女性と面談することもあるそうだが、WOB の特徴は、むやみに事業を拡大せず、活動を特化し、強みを発揮できる分野にフォーカスし続けていること、信頼できる Agency (エージェンシー)、Grants (助成金)と関係を構築、継続していること、無償で広報ツールなどを提供してくれる専門家とネットワークがあることである。

JO さんは、DV 被害者との面談で、自立のための支援を希望する女性たちに Dream Proposal (ドリームプロポーザル:夢の提案)の作成を求め、その中で次の 3 つの質問を行う。

- ① What is your biggest dream? Career, House, Car, Travel and Self-care (あなたにとって、仕事、家、車、旅行、自分自身のケアにおいて、それぞれ一番大きな夢は何ですか?
- ② What are the steps and goals to reach your dream? (その夢を実現するためのステップ と目的は何ですか?)
- ③ What is the estimated budget (cost) for the first step to reach your dream? (その夢を達成するための最初のステップに必要な予算は?)

研修では、フェローもそれぞれのドリームプロポーザルの作成にとりかかった。各自のドラフトを書いた後、一人ずつ、Jo さんがインタビューし、その様子を他のフェローが傾聴していたのだが、どのフェローも最初は、現実的な夢からスタートしがちだったのが、Jo さんに、「前例、常識を取り除いて、自分の本当にかなえたい夢を描きなさい」と繰り返し言われ、具体的に語っていくうちに、どんどん夢が夢らしくなり、フェローの目が輝いてきたことが印象的、そういう自分も、日本で考えてきたドリームプロポーザルに、思いもよらない視点が入っていった。私は2009年夏に立ち上げた、新米ママのスタートを応援することが主目的の愛知県の未就園児親子支

援団体の将来像をドリームプロポーザルにあらわしたが、Jo さんのアドバイスにより、やはり、 母親たちの支援には Child Care (託児) の仕組、施設の重要性や、一カ所の拠点でまずはじっく り実績をだすことに集中し、その後、他地域へ展開すると良い等のアドバイスを受けた。

夢をかなえるための最初の着実な step をふむために、日本に帰国後初日にすることは何かを各フェローが考え、再度、お互いに披露。思い描くことはできても実行に移すことはとてもエネルギーのいることだが、固く考えず、baby step で良いと私たちを励ましてくれる。繰り返しおっ

しゃっていた "Deserve the best and have the power to do it!" という Jo さんの言葉は、最初の一歩を踏み出すために背中を押してくれた。私自身は、ビジネスプランを作成することが 1stStep で、そのための必要な事項作成のため、Jo さんから WOB の Budget Template (予算作成様式) と Grant Template (助成金申請様式)をいただいた。



2012年9月6日(木) 17:30-19:30

Leading and Managing Nonprofit Organizations (NPO マネジメント論) @ Harvard Extension School (ハーバード・エクステンション・スクール) (Patricia Dayton 教授)

17 時半からは、今年からウェブ上での授業(インターネットを利用した e ラーニングシステムによるクラス)となったパトリシア先生が教えるハーバード・エクステンション・スクールにて開講の NPO マネジメント論の初回講義を受講。学生は、どこからでもインターネットに接続できれば PC からオンラインで受講可能となる。日本でも、ここ最近、ハーバードや MITが率先して、オンライン授業を開始したとの報道がなされているが、まさにその試みを早速経験することに。Patricia 教授もウェブクラスで教えるのは初めてのことで、色々なことがおこるかもと話していたが、初回は受講学生の自己紹介とシラバスの紹介が行われ、質問はチャットやマイクを通してスムーズになされた。自己紹介の中で、オーストラリア、ニュージーランド、ケニアといった海外からも受講している学生がいることがわかる。オンライン授業のメリットは、何といっても、このようにどこからでも受講可能なことであると実感する。

このウェブクラスは、毎週木曜日、合計 15 回開催された。 この授業は、NPO の概論を学び、NPO 設立、経営のための 重要項目を学ぶことができる貴重な機会である。私たちフェ ローは、ボストン滞在中の他の研修と重ならない木曜日の夕 方は、各自のホテルの部屋から聴講した。帰国後も聴講可能 というありがたい言葉をいただく。



2 日目

自立の為の支援を求める DV 被害者の面談およびドリームプロポーザル作成インタビューに同席。インタビューの内容は個人情報であり、他者の同席は断られることも多いが、今回はシェルターで長年 Jo さんと信頼関係を構築している Advocate(アドボケイト:被害者の身元引受人であり支援者)の Lillian さんの取り計らいもあり、同席できる事になった。

このインタビューは、ボストン南部の Dorchester (ドーチェスター) 地区にあるカソリック系

のシェルターで行われた。このシェルターの入居者は家族限定であり、24 時間オープンの受け入れ態勢で、18 人のスタッフが従事している。WOB のインタビューは、JO さん、Advocate(アドボケイト)、DV 被害者の女性の3者で行うことが原則で、Jo さんと DV 被害者のみで行うことは効果の観点からも安全面からも好ましくないという。



約束の11時、4歳の子どもを持つDV被害者の若い女性が部屋に入ってきた。面談では、(応募書類でも)相手の年齢を聞かず、過去のことは問わず、子どものことに言及せず、夢を語るところから始まる。日本では、つい相手の年齢や子どもの有無により夢の大小、種類を推し量ってしまうことがあるが、WOBのドリームプロポーザルはそれらの環境、制限を取り除いて、夢を描いてもらうことからスタートとなる。インタビュー対象の女性は、一見すると高校生のようにも見えるがしっかり前を見据えた芯のある眼差しと共に、しっかりしているという第一印象を持つ。

しかし、Advocate(アドボケイト)の Lillian によると、彼女は最初から、こうであった訳ではないらしい。7月に応募してきたにもかかわらず、インタビューが行われるまでに2カ月かかったのは、7月の頃はこの若い女性の怒りが収まらず、せっかく決まりかけていた住居の契約もふいにするほどで、そのような状況でJoさんとインタビューしても上手くいかないと Lillian が判断して、今まで時間を置いたとのこと。その間に彼女の気持ちを落ち着かせ、また、給与のもらえるインターンの仕事も決まり、前を見据える女性へと変化してきていた。DV被害者本人のその後の努力によるところが大きいが、支援者のネットワーク、お互い信頼しあってのサポートが、被害を受けた女性達を立ち直らせていくことを実感する。

面談では、過去6か月間、安定した生活を送っていること、今後3人にペイフォワード活動(他の3人のDV被害女性への援助をいとわないこと)に協力することなどが書かれた誓約書にサインをしてから、実際のインタビューに入る。

この女性は、学歴は高卒で、将来は ER のような外科医になることが夢だと、はっきりと語りだした。その後も Jo さんに導かれ、この女性は、具体的な夢の内容、今後のステップについてもどんどんと語りだしていくことになり、彼女の強いまなざしは、さらに輝きを増し、同時に信頼感が芽生えたような暖かい雰囲気も出てきた。最後に、外科医になるための最初の一歩である大学へ願書提出する為に PC が必要で、Jo さんから PC がプレゼントされた。嬉しそうに PC を受け取る姿を傍で見ていたフェローも感激した。DV 被害者の女性たちはこの日の為に、事前に色々な準備をしてインタビューに臨む場合が多いが、中には、DV や社会に対する怒りがおさまらず、インタビュー中も怒ったままで、支援を受けても Thank you すら言えないケースもあるという。DV 被害の傷の深さを改めて感じる。

文責: 文本志麻

研修日: 2012年9月10日(月)-14日(金)

STRATEGIC LEADERSHIP FOR WOMEN (SLW) SEMINAR

(女性のための戦略的リーダーシップ・セミナー)

www.simmons.edu/som/execed/programs/strategic/

Facilitator: Dr. Cynthia Ingols

Assistant Facilitator: Prof. Mary Shapiro



大学について

Simmons College (シモンズ大学 <u>www.simmons.edu</u>) は、1899 年に設立され、国内で初めて女性に職業準備を取り入れた一般教養の統合教育を行う大学である。現在、40 以上の専攻とプログラムを共学制で提供している。



Simmons School of Management (シモンズ・スクール・オブ・マネジメント <u>www.simmons.edu/son/</u>) では、国内初の女性のための MBA プログラムを提供しており、優秀な女性リーダーを育成して



いる。女性が経営で成功できるよう厳しく教育し、職場で現代求められている協力的なリーダーシップに必要な知識、経験、自信を高めることに力を入れている。

その研究機関である Center for Gender in Organization (CGO) (センター・フォー・ジェンダー・イン・オーガニゼーションズ



www.simmons.edu/son/center/cgo/、www.jwli.org)は、革新的なスカラシップ(奨学制度)と世界各国の企業における進歩的な男女平等の実践に特化し、厳しいコンサルティング、リサーチ、実践、開催への取り組みを広く行っている。職場での男女平等・多様性を促進し、企業での影響力を高めることを目的とした、特待生および管理職のためのリーダーシップ・フォーラムとして機能している。CGOの所長 Patricia H. Deyton 教授は、JWLIの本研修のコーディネーションやアドバイスなどを行っている。

SLW セミナーの概要

企業において影響力あるリーダーとなるために必要な知識と技能を高める。国際的に名の知られた先生方による講義を通し、パワーについての理解と活用、チーム構築とコミュニケーションなど、性別が企業態度と文化に与える影響力の動向に焦点を当てて、鍵となるリーダーシップとしての能力を習得する。ケース・スタディ分析、パーソナル・コーチング、グループ問題

解決、アクション・プランを組み合わせ、リーダーシップをとる際に性別がどう影響するのか、 どのように自身の実績を戦略的に可視化し、価値を示すかを学ぶ。

研修目的:

- 360°評価ツールを活用して、自分のリーダーシップ・スタイルを見る力を養い、自分の技量を高める方法を知る
- 女性が際立って活躍する実際のケース・スタディを分析し、学びを促進するための新しいスキルを適用する
- 戦略的な指導とネットワーキングが企業での自分と他者のキャリアにどう影響を与えること ができるか理解する
- 特定のリーダーシップに関する課題、挑戦、キャリアの目標についてパーソナル・コーチングを受ける
- 仕事と生活を統合するためのベスト・プラクティスを共有する
- 自分自身の成功の条件を形成するアクション・プランを含むキャリア戦略を構築する
- 様々な分野における上級女性管理職とネットワークをつなげる
- 職場で学んだことを即実践に移せるような積極的な問題解決やロールプレイに参加する

研修内容

1月目

09:30- Registration & Breakfast 登録&朝食

受付でネームカードを受け取り、ダイニングに用意されていたビュッフェ式の朝食をいただく。教室の各テーブルにはネームカードが置かれ、6人のテーブルが4つと3人のテーブルが1つで席が決められていた。参加者27名。



10:00-12:00 Laying the Foundation: Introductions 基盤作り:自己紹介 (講師:Elisa van Dam)

- ・ 事前課題であった articraft アーティクラフト(自分自身について誇りに思うことを想起させるもの)を持参し、自己紹介を兼ねて、それが意味することを説明しながら、1人2分間で発表。キャリアに関するもの、個人的な事柄とさまざま。それぞれの人柄や特性がうかがえる。
- ・ 事前に準備されていた Getting to Know You リストの特徴をもつ人物を、自由に質問し合い ながら見つけていき、お互いを知るというゲームを行った。
- ・ これから始まるプログラムをしっかり学ぶために気をつけること "Norm"を挙げ、講義に 向けての心構えを皆で確認。
- ・ 昼食前に the Leadership Practice Inventory (LPI) 360° 評価のフィードバックを渡された。クラスの半分以上の人が受けたことのある、アメリカでは一般的によく使用される、リーダーシップで必要とされるスキルがどの程度備わっているか職場の同僚や上司などから受ける評価である。自分自身が気づかない部分や傾向について知るうえで価値ある指標。多くの参加者が、フィードバックが欲しくても女性は男性のようにフィードバックを受けない、

さらには女性からのフィードバックもないと感じていた。フィードバックを得るには、自ら 尋ね、返ってくる意見を素直に受け入れ、ギフトとして受け取ることが大切であることを改 めて学んだ。

13:00-16:00 Exploring Leadership Potential リーダーシップ能力の検証 (講師: Prof. Cynthia Ingols)

・ 事前課題で読んであった『The Leadership Challenge』(J. Kouzes & B. Posner 著) *1 は、「リーダーとは?」を考える上でとても興味深い内容であった。すばらしいリーダーとして活躍する実在の

人物たちの物語が紹介されており、日本の多くが、そして私自身が考える、皆を率いる1人の強いリーダーではなく、どんなに小さなことであろうと、周りを巻き込んで、支持を得つつ、イニシアティブをとる人を



リーダーとよび、より身近なところにいて、また誰にでも実践できることを知った。ここでは、模範的なリーダーシップの 5 つの実践指針: Model the Way 模範となる、Inspire a Shared Vision 共通のヴィジョンで鼓舞する、Challenge the Process 現状を改革する、Enable others to Act 行動できる環境をつくる Encourage the Heart 心から励ます、が提唱されており、講義ではこれらについてより詳細に学んだ。

*1 金井壽宏監訳 伊東奈美子訳 『リーダーシップ・チャレンジ』ジェームス M. グーゼス&バリー Z. ポズナー著、海と月社 2010

- 事前課題であった過去にリーダーシップが最も発揮できた事柄についてテーブル内で発表。次に、テーブル毎に、模範的なリーダーシップの5つの実践指針のうち1つを示す話を1つか2つ選び、発表。達成したことをどう話せばよいか、なぜ成功実績を明確に表現する必要があるのかなどについても学んだ。
- ・ LPI360° 評価を行う理由、見方、活用の仕方を学ぶ。30 分間自己分析を行い、職場環境や 求められているリーダーシップを踏まえ、より効果的なリーダーになるための課題や自分の 長所と短所について考えた。ほぼ全参加者がフィードバックに対し何かしらのショックを受 けていた。

16:00-17:30 Coaching コーチング

(講師: Prof. Cynthia Ingols & Elisa van Dam)

- ・ 広い部屋に移動し、民族舞踊の簡単なステップが、1. 口頭のみの説明、2. 文章、3. 図、4. やって見せる、の4つの方法で提示され、人により理解しやすい方法が異なることを学ぶ。次に、3人グループとなり、一緒に練習した後に、みんなの前でステップを披露。お互いが教えあうことはピア・コーチングであり、リーダーシップ・スキルの1つであること、その方法や効果について経験を通して学んだ。
- ・ ピア・コーチングの3人グループで、LPI360°評価のフィードバックについての感想や疑問 点などについて話し、解釈、問題点、解決法などについて批判するのではなく、一緒に考え、 意見交換し、助言し合うピア・コーチングを行う。

ダイニングでの夕食

ダイニングに食事が用意されている。ほとんどが早めに食べ終えてすぐに帰宅した。終日英語の 講義を聞き、英語で課題や話し合いを行う、かなりハードな1日である。

2 日目

08:00- Breakfast 朝食

ダイニングルームに朝食が用意されている。教室の席にネームカードはなく、毎日異なる参加メンバーとチームを組んで作業し、交流を図るように、自ら席を選んで着く。

09:00-12:00 Communication Strategies コミュニケーション戦略 (講師: Prof. Mary Shapiro)

- ・ テーブル毎にカードゲームのルールの紙が渡され、無言で行うよう指示を受ける。数回練習し、ルールを確認したあと、ゲームを開始。ゲームの勝者と敗者が別のテーブルに移動する。 テーブル毎にルールが異なることを知らされておらず、自分と他者のルールが異なることを、特に少数派は多数派にルールを理解し、受け入れてもらうことが難しいことを体験する。このゲームを通して、人によってルールや定義は異なるため、他者を理解しようとすること、そして共通理解を持つことが大切であり、そのためのコミュニケーションが不可欠であること、また、職場においては、上役は同僚とルールを共有しない傾向にあり、部下とコミュニケーションをとらないのは部下に大きな不安を抱かせる要因となることを学ぶ。
- People (人) と Task (仕事/作業) および Present (現在) と Future (未来) のどれを最も重視するかによって異なるリーダーシップの特徴について学ぶ。
- ・ 事前課題のコミュニケーション・スタイル分析の結果から、4 つのコミュニケーション・スタイル (Connector:人との関係性重視,Seeker:革新的,Planner:効率的かつ自律的,Driver:推進力)のうち、自分はどれか、各スタイルの特徴、長所・短所、職場でのリーダーシップへの影響、理想的なペア、さらに、各タイプの人たちとの良いコミュニケーションの取り方、チーム構築、影響力との関連性について学ぶ。

12:00-14:15 Coaching コーチング

- ・ 各自 LPI360°のフィードバックについて、担当の講師より 40 分のコーチングを受け、そこから見えてくること、どう解釈できるか、帰国後何ができるかなどについて、助言をいただく。日本での職場の女性の地位や待遇などについて説明し、そこを加味して一緒に考えてくださった。
- コーチングが予定されていない人たちは、散歩したり、 休憩したり、スカベンジャー・ハントといって、学校の 周りを散歩して、コンテストを行うための美しいものや、 クラッシックなもの、一番人が集まっている所の写真を 撮ったりして、自由に時間を過ごす。

14:15-17:15 Women and Vision 女性とヴィジョン

(講師: Prof. Cynthia Ingols)

・ 「Pray The Devil Back to Hell」という、戦中のリベリア国で、独裁者 Charles Taylor を追放し、ガーナ国での停戦協議を実現し、平和運動を行った女性についてのドキュメント映画を観賞した。終了後、感想をシェアしつつ、魅力的なヴィジョンの要素を学ぶ。宗教に関係なく、子どものために力を合わせ平和的な方法で国の平和を勝ち取ろうとする姿は素晴らしかった。ヴィジョンを共有することで宗教と性別を超え、人々を動かすことができること、シンボルと言葉には人々をつなげる力があることを学ぶ。また、受容、柔軟性、現在と将来に対する現実的なヴィジョン、思いやり、子どものために自分を犠牲にする強い愛など、女性だからこその強いパワーを再認識する。

17:30-19:00 Offsite Dinner and Leadership Support Team Conversation

サポートチームとの外食と会話

・ 指定されたサポートチームのメンバーと夕食をとりながら自身のリーダーシップに関わる 挑戦やフィードバックについての考えなどお互いシェアし、どんな解決・対処方法があるか などの意見交換をすることで、リーダーシップについて様々なヒントを得ることができた。 その名のとおり皆がチームメンバーに対して常にサポーティブな立場で話をしていて、とて も元気づけられる。

文責: 谷岡理香

3 日目

08:00 朝食

09:00-12:00 Leadership and Gender リーダーシップとジェンダー (講師: Dr. Lynda Moore)

- ・ 学習の目的は、女性が仕事の場面でジェンダーの板挟みに直面していることを体験し、こう したジェンダーに関する事象に対処する為の実践的戦略を身につけることである。
- ・ リーダーシップの概念がパラダイムシフトしていることを学ぶ。リーダーシップとは、誰かカリスマ性のあるようなリーダー一人が、チームを指揮し全体を統括するという古い概念から、近年では、チームで目的達成の為に協力する関係性を意味することに移行しているという。
- ・ 女性のリーダーシップの場合は、ここにジェンダーという複雑性も絡んでいることを自覚する。

ジェンダーを取り入れている点が、全米で女性に特化したリーダーシップ研修を設けてい

るシモンズ大学の特徴であり、ここまでは女性という共通 項を持っている私たち日本人にとっても素直に理解でき る内容であった。しかしながら、その後のアメリカにおけ る女性のリーダーシップの学びに少なからぬ驚きも伴っ た。ジェンダーと共に、人種の違いとそれに伴う社会進出



の壁を自覚させることである。アメリカ社会で女性とリーダーシップの関係は人種によって 下記のように異なる。

1. 白人=ガラスの天井

私たちにとっても馴染みのある言葉であり、ヒラリークリントン氏が、民主党の大統領 候補として、オバマ氏と接戦となった際にも引き合いに出された表現である。

- 2. アフリカンアメリカン=コンクリート天井 白人女性にとってリーダーシップがガラスの天井なら、黒人女性にとってはコンクリートの天井になる。
- 3. ラテンアメリカン=滑りやすい床 天井という上を見る以前に、ラテン系アメリカ人女性のリーダーシップは足元がおぼつ かない状況である事を意味する。言葉や教育レベルの問題が大きいという。全米の女性 管理職中、ラテンアメリカンの割合は3%という数字がそれを裏付ける。
- 4. アジアンウーマン=マイノリティのモデル的存在。 ロールモデルも少なく、リーダーシップの統計の数字としても出てこない。一方で私達はアジア人女性に特化した DV サバイバーの為の NPO で研修を受け、実際に多くのアジア人女性と接しているだけに、その彼女たちが見えない存在になっていること、彼女達のみならず、私自身を含めて「見えない存在」であることを示され、アメリカにおける人種問題の根深さと現実の厳しさを突きつけられた思いであった。ジェンダーと人種に絡む複雑性を自覚した上で、新しいリーダーシップを構築するための戦略を考えることが必要ということであろう。
- ・ ジェンダーの板挟みを実感するような職場を舞台とした寸 劇を見る。「ポーラの問題」と題されたこの寸劇は、のらり くらりとした答弁しかしない(しかしながら悪人ではない) 男性管理職と女性管理職2人の会話である。30分ほどの芝居 の中で、受講生は当然ながらポーラに感情移入をし、ポーラ



の要求を曖昧にはぐらかしていく男性に対してある種の怒りを感じていく。実際に、このポーラの役を受講生数人が行うロールプレイも行い、職場の問題を整理していく。重要なことは、見えていない問題を可視化させること、新しいリーダーシップ概念に基づいて対応すること、価値あることとそうでないことを整理し、相手に「NO」と言わせない交渉術を身につけることであり、その為にもサポートしあえるネットワーク作りを行うことが必要である。ロールプレイを通し、参加者は、「feel」を多用していたことに気づかされる。ビジネスの世界では、女性が多用する「feel」は意味を持たない為、「think」に置き換え、何をしたか、何をするかという具体的な答えを導きだすようにとの指摘が講師からなされた。女性リーダーは、ジェンダーに中立ではない現実をしっかり見据えた上で自身と組織の利益の為に動くことが求められている。

12:00 - 3:30 Lunch

13:35-16:30 Enhancing Your Strategic Network 自身の戦略的ネットワークの力を高める (講師: Dr. Stacy Blake-Beard)

- ・ ネットワーク作りについての講義である。自身のネットワークを整理することから始まるのだが、意外と難しい。3 グループに分けられたマッピングの欄は、1. 仕事関係のネットワーク、2. 自身のキャリアを伸ばすためのネットワーク、3. 個人的な支えとなっているネットワークに分類されている。こうしたやり方そのものに、効率的でドライなアメリカと、曖昧ではっきりさせることを望まない日本の違いも感じたりするが、自身のネットワークの可視化と一覧性という学びは初めてのことであり、戸惑いつつも興味深い。
- ・ ネットワークを俯瞰した上で、目的と手段によってどのネットワークを活用できるかを気づかせる。当然ながらネットワークをどう組むか、目的によって適正規模は異なる。そして、 戦術的なネットワークを再構築する為に、関係性を深めた方がよいネットワーク、自身に足りない分野に新たなネットワークを築くこと等を確認する。
- ・ 講師のエネルギッシュで情熱的な教授法に目を開かされる思いだが、3 日目ともなると、英語を母語とするアメリカの参加者達にも疲労の色が見える。彼女たち自身も、長時間にわたって考え、整理し、自身に照らし合わせ、キャリアアップの方法を探るという行為は初めてなのだ。個人としてはアメリカにおける人種とキャリアについて学んだこの日、改めてこれまでの授業中の発言を振り返ると、発言数は圧倒的に白人女性のそれが多いことに気づく。それぞれの組織で管理職を務めている有能な女性達であるが、このような新しい空間に身をおいた時に、人種間に暗黙の大前提のようなものがアメリカ社会にあるのだろうか。わずか27名の参加者から、そう推し量ることには無理があるかもしれない。

16:30-18:00 Leadership Support Team サポートチームによるグループワーク

・ 2 日目に組んだサポートチームメンバーと「これまでの研修で学んださまざまなリーダーシップのスキルについて、職場やプライベートに持ち帰ろうと思っていることを話し合い、更に、翌日に控えた修了式で参加者とシェアできる「ギフト」としての出し物を考える。研修で見たリベリアの女性達の抵抗と平和運動の映画に触発され、明治期、戦争に向かう国家に対して、詩という形で立ち向かった与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」を朗読したいと名乗りを上げた。日本にも、そうした女性歌人がいた事を知って欲しいという思いと、これまで皆の意見を聞くことが多く、自身の発言数が少なかったことも名乗りを上げた理由である。

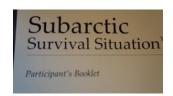
4 日目

08:00 Breakfast

09:00-12:00 Leading Teams チームを導く

(講師: Prof. Mary Shapiro)

・ 私たちが仕事を首尾よく完遂し、キャリアを伸ばして行くことは、同僚とどれくらい協力できるかという能力に深い関わりがある。そのことを、模擬サバイバル・ゲームで体験し学ぶ。研修中は、毎日自主的に違う席に座ることが求められており、チームメイトになるのは、この日、たまたま同席した6人である。つまり、自分の力や好みでチームメイトを選ぶことが出来ない状況下で、どのようにしてチーム力を培い、生き残るかというゲームである。



サバイバル・シミレーションの小冊子が個々人に手渡される。 ページを開くと、参加者がカナダの飛行機事故で湖に墜落し遭難 した事、パイロットは死亡したが、生き残った者は命に別状がな い事など、幾つかの条件が提示されている。チーム全員が生き残

るために、飛行機から持ち出せた物品ーコンパス、人数分の寝袋、マッチ、雪靴等ーの項目 が並び、必要と思うアイテムに優先順位をつけていく。

まずは個人での記入、そして次にチームで話し合い、チームとしての行動に基づいて順位を決めていく。この場に留まって救助を待つのか、救助を求めてチームで移動するのか、それによって選ぶアイテムも変わってくる。限られた時間の中で、リーダーはどのように皆の意見を聞くのか(或いは聞かないのか)を調整し、コンセンサスを得て生き残るという命題に挑む。

人(人間関係)にフォーカスを当てるのか、与えられたタスク(人命救助)に焦点を当てるのかなど、リーダーシップに求められることは多く、それによってチーム力が異なり、課題解決にかかる時間も大きく異なることを学ぶ。テーブルによっては、全員の意思統一が早く、短時間で確実に命を守ることが出来たチームがある一方で、英語圏でないメンバーがいるチームでは、全員が内容を理解するのに時間を要してしまい、緊急時の言語に絡む問題を体験学習する場ともなる。

12:00-13:30 Lunch/Coaching

13:30-17:00 Power and Leadership カとリーダーシップ (講師: Prof. Cynthia Ingols and Elisa von Dam)

・ 職場での力関係、権力についての学びで、自身に足りないものがあっても、他者と交渉し説得することで職場での力を培うことが重要であると講義で学ぶ。続いて、これを実践するゲームに移る。受講生を2チームに分け、それぞれ別室で同じことを行う。受講生は同じ会社のメンバーであり、それぞれに異なる自社株が与えられ、同室のメンバーの中から、役員を一人選ぶというゲームである。多い株券数を持つ者が勿論有利であるが、自身の株数が不足しているメンバーは、協力してもらいたいメンバーに手書きのメモで協力を求める。直接の会話は禁じられている。部屋の中では、ノートを破き、協力依頼の短いコメントを数多く書く人、長文で説得し、確実に仲間を増やそうと務める受講生など、限られた時間の中で数え

切れないほどのメモが飛び交った。

こうした授業のあり方と、それに応える受講生であるアメリカ人管理職女性達のポジティブな行動力に感服する時間であった。私たちの部屋では、当初から圧倒的な株数を保有していたアジア系の女性に投票が集中し、彼女自身も、当初は自身を推薦することに戸惑いを感じたようだが、最後には、自分が役員にふさわしい人物であると自信に満ちたプレゼンテーションを行った。NASAに勤務するその女性は、これまでの授業内では決して積極的に発言するほうではなかったが、自らが必要とされる場面では堂々と意見を述べるその姿勢に、アジア系女性が持つ奥ゆかしさとキャリアを持つ女性の逞しさの両方を見た思いであった。

17:30 Reception 修了証書授与

18:00-20:00 Dinner and Graduation Celebration

・ 夕方からのレセプションで研修の修了証書をもらい、班別にそれぞれの4日簡の学びと前日 のグループワークで準備した「ギフト」を発表。「君死にたまふことなかれ」は、英語の注 釈を付けて、日本語で朗読を行った。無事に終わってほっとする。クッキーやキャンディー などが配られ、和やかなひと時となる。







文責:榊原清乃

5 日目

08:00 Breakfast 朝食

09:00-11:00 Strategic Path to Leadership リーダーシップを発揮するための戦略的道筋 (講師: Prof. Cynthia Ingols & Prof. Mary Shapiro)

- ・ SLW での研修最終日は午前中のみの開催で、自分の長所、価値観、優先順位を明確にすることを目的とし、さらに、この1週間で学んだことの成果を結集して、今後のリーダーシップを発揮してのアクション・プランを立てる内容が中心であった。
- ・ この日の最初は、自分の長所、価値観、優先順位を明確にするためのワークショップを行う。 3人がグループになり、1人の長所を他の2人が述べ合う。他者のよい面を見出すこと、また他者からみた自分の長所、自分でも気づかなかったような長所が分かるという、自分理解にも役立つ。自分の強みを理解することにより、今後どのような立場でどうふるまっていけば、自分の能力を発揮できるかがわかる機会である。
- ・ 次に、初日に決められた 3 人 1 グループのピア・コーチングのグループごとに集まり、自分の "リーダーシップの旅"を模造紙に折れ線グラフで各自あらわして、その後、3 人内で、お互いに発表しあう。それぞれの "リーダーシップの旅"を発表しながら、お互いに質疑応答し、今後のアクション・プランとあわせてディスカッションを深め、3 か月後に、今回作成したアクション・プランの進捗状況をお互いにメールを送りあってチェックし合うことを

約束した。チームによる約束事により、一人で実行するよりもチームの目があることにより、 より実行力が上がる狙いもあると感じたし、さらには、この貴重なチームのネットワーキン グを継続、維持できることもメリットである。

11:00-12:00 Program Reflections and Closing プログラムの振り返りと締めくくり

- ・ SLW で学んだことを踏まえ、未来(3か月後)の自分に手紙を書く。この手紙は、受講生が、振り返りの機会を得て、さらにアクション・プランを継続的に遂行できるよう、その年の12月(SLW 受講の3か月後)に届くように発送される。
- ・ 研修の最後は、受講生が一つの大きな輪を作り、一人一人このプログラムで得られたことを 単語にして全員に伝える。

12:00-13:00 Boxed Lunch お弁当ランチ

帰宅の飛行機等のスケジュールにあわせ、各自解散の時間となる。共に学んだ者同士、握手やハグ、写真を撮りながら、いつまでも別れを惜しみながら、ネットワーキングを続けていこうと誓いあった。



SLW セミナーの一週間は、以上のように、朝早くから夜遅くまで講義、グループワーク等がスケジュールされ、先輩フェローからもこの1週間のタフさをお聞きしていたが、噂にたがわぬ大変な一週間であった。生徒も積極的に発言することが求められる授業スタイル、教授からの講義だけでなく、ビデオ鑑賞、スキット、大小さまざまなグループによるワークと、約1時間ごとに次々と場面が切り替わり、ついていくのが精一杯、というのが終わった時の率直な感想であった。さらには英語という言葉の壁もありタフさが倍増したが、日本人女性としての代表的意見が聞かれることもあり、少しでも皆の学びにつながる意見を述べて貢献できるようにしたい、と常に思い続けていた緊張の一週間であった。

大変さばかりを強調してしまったが、その分、コースを無事修了したときの達成感は何ともいえず嬉しい気持ちであった。また、グループワークの途中に、自分自身の意見が他のクラスメートの思考に影響して、日本の事情を理解することを促進したり、国を超えての女性達のリーダーシップ力を発揮することの大変さがより理解できとても参考になった!という様なフィードバックをもらえたりした時も、一生懸命コースにのぞんだからこその充実した達成感を味わうことができた。

SLW セミナーは、綿密に設計された素晴らしい講師陣による集中的な一週間講義であり、クラスメートは皆、それぞれの分野でがんばってきた管理職や候補の女性達で、そのような女性達と一同に出会えるネットワーキングの貴重な機会でもあり、それぞれの仕事にもどったときに、この一週間での学びを活かして実践的にリーダーシップを発揮していく力がつくプログラムでもあり、このように素晴らしいコースで学べる機会は、JWLIのプログラムの優れた特長の一つだと改めて感じた。

研修日:2012年9月17日(月)-19日(水)

ASIAN TASK FORCE AGAINST DOMESTIC VIOLENCE (ATASK)

(アジアン・タスク・フォース・アゲインスト・ドメスティック・バイオレンス)

President & Executive Director: Ms. Linda Chin

www.atask.org



活動目的と内容

さまざまなアジア圏の家族およびコミュニティでのドメスティック・バイオレンス (DV) を防止し、被害者に希望を提供することを目的とし、Massachusetts (マサチューセッツ) と New England (ニューイングランド) に住む DV の被害者もしくはその危険性の高いアジア人家族および個人の支援を中心に行っている。また、多くが東アジア、南アジアそして東南アジアからの移民や避難民であり、英語能力が限られており、家族の 95%は、連邦政府の貧困水準より収入が低いため、その支援も行っている。2011 年には、442 人に対し、安全計画、住居、医療、公益、就職、移住と法的問題、精神的健康面での治療先の紹介、金銭面での読み書き能力、その他の生活技能において支援を行った

- ◆ 二ヶ国語を話す Advocate (アドボケイト: 社会福祉においては、被害者などの支援対象者 の権利を守るため、代弁し、必要な資源や支援を獲得できるよう取り組んでいるソーシャル・ワーカーのこと) がクライエントのニーズに最も適した文化的および言語的なケアを 行う。
- ◆ アジア人シェルター(避難所)と権利を擁護・支援するためのアドボカシー・プログラム「ASAP」。
 - ・ 住居(緊急避難所): 一時的な住居や食事、衣服、交通手段の援助など(2011年25人の大人と29人の子どもが利用/4家族にシェルターから自立生活のための住居に引っ越すまでの移行住居を確保)
 - ・ アウトリーチ: 24 時間多言語対応ヘルプラインサービスなど(2011 年 412 件以上)
 - プログラム: 多言語対応のアドボケイトによるサービス(法的アドボカシー:2011年80人以上)、自己肯定感、生活技能、職業即応能力を高めるための英会話プログラム「Life Skills and English for Speakers of Other Languages (ESOL)」や Asian Women Empowerment (アジアン・ウィメン・エンパワメント) プログラムの提供(2011年43人)

◆ 教育およびトレーニング:

2009 年から十代向けに取り組んでいる活動 Youth Empowerment Project (YE) (ユース・エンパワメント・プロジェクト) では、学校や下校後、夏休みに DV や文化の違いなどについて教えたり、被害者やその支持者が芸術を通して世間の認識を高める活動をする上でのサポートを行ったり、DV やデート DV の問題におけるアドボケイトとなるための力をつ

研修内容

目標:

- 女性が運営する NPO におけるリーダーシップについての理解を深める (マネージメントスタイル、動機、仕事と生活のバランス)
- 中規模団体における運営とプランニングを理解する(組織体制、戦略的プランと財政、プログラム、開発プラン)
- 女性と子どもを対象としたヒューマンサービス企業へのサービス提供の実際を見学する(現場、プログラム、実践)

DV 被害者を援助する組織であることから、建物とオフィスの場所が見つけにくいようにしてあり、また、扉は常に鍵がかかっている状態で、加害者から被害者を守るように配慮されていた。多くのスタッフはアジア系の女性で構成されていたが、男性も働いている。オフィスの内装は、DV の被害者が自分たちのプライドを保ち、コントロールできるという自信を持てるよう、小奇麗にしている程度であるということであった。細かいところまで配慮が行き届いている。

1月目

研修スケジュールを確認後、まずは 2013年に設立 20 周年を迎える ATASK の歴史について、創始者 Cheng Imm Tan が ATASK を立ち上げるに至るまでのストーリー「Building Shelter」(『Dragon Ladies』に掲載されているストーリーの 1 つ)をもとに話をしてくださった。 1986 年、アジア人はマサチューセッツ人口の 2.4%を占め、その多くがボストン地域内に住む移民や避難民であった。その女性の多くが DV の被害にあっているが、文化的な理



由や慣習から我慢することを強いられていたり、英語が理解できず話せないことが社会文化的な障壁となりどのような支援が受けられるか情報を得られない環境に置かれ、また助けを求めることができなかったりする。もし、援助を求めても文化を理解してもらえず誤解を受け、支援が受けられなくなったり、加害者として扱われることになったり、十分な支援を受けることができない。ボストンで 25 年以上前からボランティアグループに DV 被害に遭っているアジア移民のためのサービスと利用との重要なギャップについて提議してきた Ms. Cheng Imm Tann が ATASK の活動を始め、1992 年に法人化した。特に言葉の問題、壁が大きいと感じた ATASK はスタッフにアジア圏の言語が話せ、文化を理解しているバイリンガルを多く迎え、当時、ニューイングランドでアジア人虐待被害者とその子どもに対する多言語対応の緊急避難所、アドボカシー・サービス、アウトリーチ、教育プログラムを唯一運営する団体であった。現在、英会話教室 ESOL を設け、DV 被害女性をサポートしている。1997 年には Rowell(ローウェル)のカンボジア人コミュニティへのサービスも開始した。

近年、ESOL へのニーズは高く、希望者の 10 - 15%しか受け入れることができなかったことから、もっと多くの人が学べる方法として取り入れた革新的な試みが、セカンドライフという技術である。イギ

リスの企業が開発したインターネットを通して 24 時間いつでも英会話教室に参加できる languagelab.com で、バーチャルな世界でアバターを使って移動し会話を行う。Chin 氏が contextual (= place)(文脈=場所/設定)、 conversation(会話)、confident (uninhibited)(機密 (制約なし))の 3 つの特徴を挙げていた。参加者が様々な場所や状況の設定(例えば、ホテルでチェックインするなど)から選択でき、より実践的な英会話が勉強でき、実際の生活への応用がしやすい。会話が苦手でも、文字をタイプしたり、話す課題が記載されたカードを見たりすることができる。また、画面に映ることなく、アバターによる匿名化できる。そのため、全く別の自分を演じることもでき、積極的に参加しやすくなり、自信もつけやすい。Chin 氏は、ATASK 用にボストンの街をカスタマイズすることを検討している。この技術は PC とネット接続なしには実施できず、PC の購入とそれに伴う資金調達や、ネット接続の特別料金の設定、アクセスポイントの増加を目指したケーブル会社 ComCast との交渉など、先を見通したプランを立て活動している。

ATASK が単に素晴らしいアジア系 NPO としてではなく、アメリカで最も優れた NPO として認識されるようにしていきたいと語っていた。

これまで政府や財団などからの資金提供が主要であったが、個人的な寄付も受けるようになったことで、人々の認識が高まり、個人からの募金が増えた。非営利団体が継続して運営・活動していくために、明確な目的をもって効果的なプログラムを実施し、コストパフォーマンスが高いことを常に周りや資金提供者に実証しなくてはいけない。これまでは支持したいという理由で募金してくれたが、投資したいという気持ちで募金をしてもらえるように変えていきたいと述べていた。NPO 運営は大変難しく、国の経済状況が悪い時は社会的な変革をもたらす活動はチャレンジングなことではあるが、実はそういう状況だからこそ、NPO が活躍できるときでもあるとし、現在、組織で働くスタッフと被害者の両者に多くの機会やチャンスを生み出し、子どもたちにとって良い社会を作り上げ、弁護士や擁護者といった専門職を育成することに取り組んでいる。資金調達やチャリティなどのためのオークション商品の依頼などを行っている Treasurer (財務担当者)の Kondratuk 氏からは、ATASK 最大のチャリティイベントである Silk Road Gala (シルク・ロード・ガラ)の様子や次回の構想について話を聞き、研修生一人一人の活動についているいろなヒントやクリエイティブかつ具体的なアイデアをいただいた。また、アメリカには、非営利団体用の経理ソフトがあることを知り、非営利団体が活躍し、より認識されていることが

YEPでは、参加した十代の若者が中心となって活動する PSA において実施しているワークショップを体験した。デート DV のシナリオでそれぞれの出来事においてそのまま残るか、離れるか、選択をさせ、最後に DV の兆候を示す出来事について意見を交換し、その理由について詳しく説明し、どう行動すべきかを教え、質問があればそれについて話すという流れになっている。



2 月目

うかがえる。

毎月下旬に行う Grants Management Meeting (助成金管理会議) に参加した。NPO 団体の場合、資金集めがとても重要であることから、通常は grants (グランツ=助成金/補助金) の担当者、または上層部のマネージャーが行うが、それぞれのマネージャーが担当している役割におい



て、より良いプログラムを実践するにあたり必要な資金集めを自ら行い、実践を通して学ぶ仕組みになっている。ATASKの支援活動の幅が広いことからとても効率的であるし、現場をよく知るスタッフがそこで必要とすることを実現するために grants を申請するので、責任感ややる気が高まり、より具

体的で説得できる書類を提出できる。大変な思いをして得た資金は大切に効率的に活用しようと考える。また、各スタッフが grants の書き方を学ぶこともできるし、お互いの刺激にもなる。ミーティングでは ATASK 全体として資金繰りはどうかが明確になり、申請において困難を感じている場合は他のスタッフの助言や協力を仰ぐこともできる。

ATASK は DV 被害者であるアジア人女性が自信をもって生活できる力を与えるためのプログラムに力を入れている。生活能力向上のためには、やはり英語力の取得が主要な課題である。 ESOL 教室には、小さなお子さんを持つお母さんが多く、幼稚園や学校の書類や先生とのやり取りがとても大変で、また、いい仕事に就くためにも英語力をつけたいと話していた。言葉は生きる術なのである。Life Balance(ライフ・バランス)が彼女たちを支える上でのもう一つのキーワードである。

午後は、ATASKが所有するシェルターに向かった。所有するのは20年近く使っているとても古い大きな家1軒のみで、比較的安全な環境の中にある。基本的に24時間体制でスタッフが常駐しており、シェルター専任のアドボケイトもいる。住人以外の人を連れて来ること、場所を知らせることは禁止されている。しかし、他のシェルターと違って、個人およびその意見を尊重した対応を行っている点がユニークである。アジアといっても食べるお米の種類や炊き方が異なるため、複数の炊飯器を用意していて、冷蔵庫も複数用意されている。シェルターは、被害者を保護する意味もあるが、自立に導く役割も持っているという認識のもと、外で誰と会っているか聞かず、携帯電話の所持も許可している。シェルターでの滞在は基本的には6ヵ月~1年で、その後 Transitional Housing(移行住居:シェルターから自立して生活する家に引っ越すまでの仮住まい)に引っ越すにあたり、本人が希望する地域で新しい生活の場を探す形態をとっている。被害者の目線でプログラムや対応がなされている。

2012年9月18日(火)18:30-20:00

ボストン日本総領事館でのフィッシュ厚子さんへの授与式出席

これまで厚子さんがボストンのみならず日本の人々のために貢献してきた活動に対し贈られたもので、そのような場に招待いただけ、同席できたことがとても光栄であり、うれしく思った。大変な苦労をなさってきたからこそ、人の痛みがわかり、人を助けるとい



う思いだけでなく、実践してきたことが素晴らしく、我々JWLIのフェローが学ぶべき点だと思う。また、一人ではなく、夫のLarryさんや家族の支えがあり、また賛同しサポートしてくださる人たちの力が実現には不可欠だったことが伺われた。東京から厚子さんのお姉さまもいらして本当にうれしそうだった。

3 日目



午前中に Tufts Clinical and Translational Science Institute (タフツ・クリニカル・アンド・トランジショナル・サイエンス・インスティテュート) が Community-based Participatory Research (CBPR) (地域ベースの参加型リサーチ) の一環として ATASK と共同で行っている研究の経過報告に参加した。コミ

ュニティの人々が健康に生活を送れるよう支援するための研究である。ボストンはアジア人の中でも特に中国人の人口が多くを占めており、言語と文化の違いから、なかなかアメリカで医療機関を利用できなかったり、当たり前とされている予防のための検査を受けなかったりする。このような現状を把握するうえで、コミュニティの協力が必要であり、協力を得るためには研究の意義を理解してもらう必要がある。研究という名のもとに、人々が検査や治療を受けられるようにもなる。また、調査結果をもとに必要な支援やプログラムが明らかとなり、効果的な方法を実践できるようになる。こういった共同研究はコミュニティや人々に還元できる活動である。

プロジェクト・ディレクターである Sauma 氏は、組織全体の動きを把握し、スタッフやアドボケイトの助言・指導を行ったり、必要な情報をリサーチしたり、提供したり、個々のニーズに合わせた情報の提供やトレーニングも行っており、ATASK で働くスタッフのサポートにも力を入れている。

開発とコミュニケーションに関しては、Skypeck 氏と前任者の Sawame 氏から話を聞いた。この部署は、資金調達と深く関係している。Silk Road Gala は特に大きなチャリティイベントで、翌2013年に20年を迎えるということでとてもスペシャルで盛大な催しを計画しているとのことだった。ATASK への寄付金の額が大きい人々が招待され、感謝を表すイベントでもあるので、ゲストが楽しめる催し物でなくてはならない。Bloomingdale(ブルーミングデールというデパート)を貸し切ったり、デザイナー協賛でチャリティイベントを行ったり、小さいものだと大学で学生向けに行ったりしていて、様々な形での資金調達活動をしていた。近年は個人からの募金が増えている。財団や企業などに比べると金額は小さいかもしれないが、集まれば大きな金額になる。あとは、ブランド構築の重要性を学んだ。

Chin 氏が参加する Cambridge Community Foundation Board Meeting (ケンブリッジ・コミュニティ・ファンデーション・ボード・ミーティング) に同席し、地域に根差したコミッティーがどのように資金分配を決めているのかなどについて学ぶ機会もいただいた。ボストンでは、人々がより快適に過ごせるように、特に子どもなどの弱者に対し、本当に献身的に活動している。そのための新しく効果的であると判断される企画が始められるよう、まずはその構想を実現するために本コミッティーが支援して後押しするけれども、継続については本人の責任で行っていくという考えのもと決断がされていた。どんなにいい企画でもお金がないためにできないことが多いので、第一歩を踏み出すチャンスを提供し、さらにコミュニティに根差しているので、コミュニティ内の組織団体や人々からの協力も得られる。

文責: 文本志麻

研修日: 2012年9月20日(木)

WOMEN'S LUNCH PLACE (WLP)

(ウィメンズ・ランチ・プレイス)

Executive Director: Ms. Sharon Reilly

www.womenslunchplace.org



活動目的と内容

ホームレスまたは貧困の女性の為に、安全で心地よい日中のシェルター(避難所)、栄養ある食事、サービスを提供する。女性たちを尊厳と敬意をもって扱い、各人のニーズを満たすよう熱心に取り組むコミュニティを促進することを目的とし、現在、週6日(月~土 07:00-14:00)サービスを提供している。約40%がホームレスで、残りは一時的な住居もしくは低所得者用住居に住む女性。20%が65歳以上。

◆ 週6日、栄養価の高い朝食(08:00-11:00)と昼食(12:00-14:00)を提供。女性の自尊心と 正常感を高めるために、レストラン・スタイルで提供し、ベジタリアンの食事も用意して いる。

2011 年度(7/1/10-6/30/11)44,036 食

2012 年度(7/1/11-6/30/12)55,704 食 ↑ 26%増

2013年度(7/1/12/6/30/13)75,600食 ↑36%増の見通し

*2011年7月の3,006食に対し、2012年7月は6,144食と約2倍となっている。

- ◆ 自立した生活ができるように、個別対応やリソース・センターの提供を行うアドボカシー・ プログラムを通して、ホームレスまたは貧困の女性の多くが日々直面する壁を壊していく ためのさまざまな挑戦や活動(例えば、職・住居探しや医療ケアなど)を支援。(2012 年 443 人 252 人が居住支援を必要としており、35 人が定住先を得た)
- ◆ シャワーやランドリー、昼寝部屋、健康プログラム(週 5 日医者が常駐など)や創作表現 プログラム(絵画、ヨガ、編み物、ダンス)などのゲスト・サービスの提供。

共通理念

- ・ なんびとたりとも飢えに苦しんだり、ホームレスであったりしてはならない
- すべての人間は尊厳と敬意をもって扱われるべきである
- ・ どんな状況の女性とも会って、彼女のニーズに合ったサービスを基準とし、調整する
- ・ 身体的かつ精神的な支えを提供しつつ、丁寧で心地よく安全な環境でサービスを提供する
- ・ ゲスト、スタッフ、ボランティア、役員がお互いを理解し、受容するコミュニティを作る

研修内容

- 1. 施設案内ツアー
- 2. State Street ビデオ上映

- 3. WLP プログラムとサービスについて (Kelly Doel 氏)
- 4. WLP 予算と財政的課題について (Sue Morong 氏)
- 5. WLP 戦略的発展とアメリカの寄付文化 (Cindy Hall Koure 氏)
- 6. 非営利団体を率いる上で思う事 (Sharon Reilly 氏)
- 7. まとめ

今年度初めて研修先として組み込まれた NPO 団体である。多くのデザイナーブランドの高級店が立ち並ぶ通りに、歴史ある大きな教会 the church of the covenant の地下に場所を借りて活動している女性のための Wet Shelter である。Wet Shelter とは Dry Shelter では対象外となるドラッグやアルコール依存症の人も対象にしている。自ら女性と主張するのであれば、例えば性同一性障害の人も受け入れる。子どもを持つ家族も受け入れているが、住居の提供は家族が優先されるためか利用者は少ない。一方で、シングルの女性はなかなか支援を受けられない。一人一人に敬意を払い、尊厳をもって対応することをモットーとしており、シェルターに来る人々をゲストと呼び、食事は出来合いのものではなく、フレッシュで栄養を考えて料理したものを提供し

ている。より快適に過ごせるよう昨年改築し、照明は徐々に明るくなるように設定、テーブルには花を飾っている。手芸やアートが楽しめるスペースもあり、一時的ではあるが、つらい生活を忘れて集中することができる。ボランティアには、能力や技能に応じた場所での支援をしてもらっているとのことであった。



設立者である Eileen Reilly が自ら歩んできた道のり、支援してきた人々について語ってくれた。 1980 年代にボストンの男性および女性の為の宿泊避難所 Pine Street Inn で二人のボランティア Jane Alexander と Eileen Reilly が出会い、女性の立場が守られるような避難所は少なく、女性 たちのニーズに応え、栄養ある、家庭的な食事を提供し、日中、家と呼べるような場所を作りた いと考えたことから始まった。ヴィジョンを語ることが多くの人々の共感を得てその後押しで実 現につながった。1982 年 11 月 15 日に 12 人の女性に最初の昼食パンとチリを提供し、それから 30 年続いている。とても安全な環境で場所を借りることができたことはとても幸運であったと話していた。

週3回午後のみシェルターをオープンしていたが、多くが知るところとなり、1984年には週4日、1986年には週5日、1996年には週6日オープンすることとなった。ゲスト(利用者)の数が増え、ニーズが多様化してきた。1992年に、以前ホームレスだった女性をアドボカシー・サービスを提供するために雇い、成果を収めたことから、1995年にアドボカシーおよび法的支援プログラムの設立に至った。2003年にリソース・センターが加わり、2005年にはフルタイムのコックを雇った。現在



は、1 日当たり 150 人 \sim 200 人の女性にサービスを提供しており、その活動は 350 人以上のボランティアによって支えられている。精神を患っている人々も多く、Eileen は精神科医であり、そのケアも積極的に行っているようであった。

基金の多くは個人からの寄付であり、残りは企業やスポンサーからの寄付で、政府からの基金は 1%以下。今年の食事の提供は昨年の 2 倍で、特に資金集めは大きな課題となっているとのことだった。どの財団がどのような活動に資金提供を希望しているかリサーチすることができる

Foundation Center (ファンデーション・センター) のデータベースを利用したり、様々なチャリティイベントを催したりしている。12 月はチャリティによる基金の 50%を占めていて、安定したパイプラインの維持がとても重要であり、常に使命感をもって活動しているが、とても厳しいと話していた。多くの人々の支えなしでは NPO 団体を維持していくのは難しい。その支持をどのような形で得るかがとても重要な鍵を握っている。

2012年9月20日(木) 12:30—14:00

シモンズにて、フィッシュ厚子さんとのミーティング

今日までプログラムを通して特に困難だったこと(challenging)と興味深かったことについてそれぞれのフェローがお話した。その中で、日本人の「恥の文化」が各個人の活動を妨げていることが指摘された。ヴィジョンに向かって計画を立てるうえで、常にポジティブに、柔軟に、クリエイティブに、そして実践的に考えること、そして何よりも楽しむことが重要であるという意見を聞き、活動を続けていくためにもこれらはとても大切なことだと感じた。これまで訪問した NPO 団体や SLW で学んできたことである。

MCML CONSULTING SERVICES, LLC (MCML コンサルティング・サービス, LLC)

President: Ms. Karianne R Panos

www.mcmlconsulting.com



活動目的と内容

アドボケイト、コンサルタント、インストラクター、そして指南役として、企業、学校、家族が、言語および文化的スキルに対する高い自信が持てるようにクライエントと密接に関わり、新しい環境で十分能力が発揮できるような強固なサポートシステムを提供すべく、個人の発展を促進し、長期の成功を生む雰囲気を築く。

- ◆ 専門家と企業対象の国際コミュニケーション・スキル 海外の女性専門職者を対象としたリーダーシッププログラム、企業を対象とした比較言語 的および比較文化的な見方の開発プログラムなど。
- ◆ 留学生サポートサービス 教科ごとの個人指導/教育、教育機関への留学生組込みコンサルティング・サービスなど。
- ◆ ライフスタイルおよび教育における包括的サポート 移住前後の支援サービス、翻訳・通訳サービス、教育関連の連絡係および指導など。

理念:学習プロセスへのアプローチ

- ・ 実世界の経験と組み合わせた科学を基盤としたアプローチ
- ・ 言語と文化に関する基礎的な理解を基盤としたアプローチ
- 言語的違いの信頼できる分析を基盤としたアプローチ

研修内容

Panos 氏は複数の言語が話せ、経験を通してアジアの文化に精通しており、共感できる点が多かった。多言語を扱い、10年以上ヨーロッパとアジアで過ごして得た知識から異文化に熟達した創設者の専門知識を基盤とし、アジアからアメリカに移住してきたが、新しい文化を上手に取り入れるためのスキルも知識もなかった家族に対し、MCMLが円滑な移行を確実に行えるようコンサルティングを行ったことが始まりである。その後、ビジネスを広げ、ボストンの国際的なコミュニティでのニーズに対しサービスを提供している。

本研修では、特に日本とアメリカとの違いに焦点をあてて、社会的文化に加え、考え方や行動を言語の特徴と合わせて説明してくれた。言語はその国の文化的特徴をとてもよく反映しているし、2つの国民性や社会的文化を比較することでより自国のことがよく見えてくる。縦社会と横社会が何を意味していて、どう違うのか、という点から多くを学び、理解した。私たちは日本で社会貢献につながる活動においてリーダーシップをとることを目的としているため、アメリカで学んだことで日本の弱点を補えるのはどのスキルで、それをどのように取り入れるのが適当か考えるうえでとてもよかった。海外経験があっても違いについてロジカルに考えることはないため、それはどこから来るのか、なぜなのかわからなかった点が、これを通してより理解を深められる



部分が多かった。Simmons(シモンズ大大学院)の SLW Executive Course(SLW エグゼキュティブ・コース)を受講するにあたり、事前に知っていると何らかの助けになると感じた。個々のプロファイリングもなかなか興味深いものであった。

2012年9月20日(木) 19:00-20:00

Channel 7Ms Mary Sit 氏が司会を務める「Asian Focus」テレビ出演

ASIAN FOCUS SHOW 318 TAPED: 9/20/12 AIRS: 5/19/13

アジアにフォーカスをあてた Mary Sit さん司会の番組で、厚子さんの活動についてインタビューする際に JWLI のことがフィーチャーされることになり、清乃さんと野枝さんが一緒に出演することになった。突然、来年 5 月放送分の収録と聞かされ、皆戸惑ってし



まったが、無事収録を終えることができた。理香さんがアナウンサー出身ということもあり、陰ながらサポートしてくれていた。収録後は Irish Bar でお祝いし、楽しく過ごすことができた。JWLI JWLI の活動をより多くの人々に知ってもらうことで、多くの女性が積極的に活動を始めるきっかけとなり、より女性が活躍しやすい社会ができてくるとうれしい。

文責: 文本志麻

研修日: 2012 年 9 月 21 日 (金)

THE ITALIAN HOME FOR CHILDREN

(ディ・イタリアン・ホーム・フォー・チルドレン)

Director of Development: Ms. Melanie S. Lima

www.italianhome.org



活動目的と内容

民族、国籍、宗教に関係なく、家庭や学校、コミュニティにおけるトラウマが原因で学習障害、情緒的、行動面、精神面で問題を抱える 4 - 14 歳の子ども対象の居住施設および日中の治療施設である。さまざまな行動および精神的な問題のアセスメントや治療に特化した支援を行い、家庭やコミュニティでうまくやっていけるようにすることを目的とする。現在、1 日あたり約100人の子どもがジャマイカ・プレイン地区のプログラムに参加し、約20人の子どもがイースト・フリータウン地区のプログラムに参加している。危機下にある600人以上の子どもとその家族に対しプログラムを実施。地域密着型のプログラムを通して4-18歳の子ども約320人を援助してきた。当敷地内の学校、放課後プログラム、サマー/長期休暇プログラムに参加した子ども70人が学校で読みと算数の学力向上が確認されている。退所した子どもの90%以上がコミュニティの家族のもとに戻った。

◆ 居住施設サービス:

- ・ Jamaica Plain (ジャマイカ・プレイン) の Boston Center (ボストンセンター) では、 男女共同の 3 つの寮で、4 12 歳の子ども 30 人に地域に根差した急性治療(C-BAT) と信頼性の高いアセスメント・サービスを提供する。緊急もしくは予定された入所は 24 時間可。
- ・ 行動治療住居施設 (BTR) は、学校に通える 21 人の男女共同の 2 寮で滞在は最長 6 ヶ月まで。退所後 3 ヶ月間、コミュニティ再統合およびサポートサービス (CRISS) プログラムを提供し、継続的サポートとアウトリーチ・サービスを行う。
- ◆ Mary SavioliPallotta Education Center (教育センター):

寮の生徒と通学する生徒に様々な教育サービスを提供する敷地内の学校。7クラスあり、1クラス生徒10人、先生、補助員、チャイルドケア職員で構成されている。読み、スピーチ、作業療法などの特別プログラムも実施している。

◆ 医療サービス:

個人セラピー、セラピー・グループ・ワーク(性的虐待の被害者対象、虐待反応性行動、 アート/アクティビティ・グループなど)、家族治療、ケース・マネージメント、アフター ケアプランとサポートなど

◆ セラピー・プログラム:

危機下にある子どもと家族のための、放課後、長期休暇、サマーキャンプなど、自尊心を

高め、自己スキルを築き、他者と協力して活動することを促進し、身体的・精神的健康を 改善し、地域のリソースへのアクセスを増やすためのプログラムである。日常業務を身に 付ける一方で、スポーツ、美術・創作、歌、ダンスなどのアクティビティで興味ある分野 を楽しみ、友人関係を築き、リラックスできるプログラム。

◇ 家族/地域医療:

子どもの治療チームの重要なメンバーとして家族が参加し、子どもが当施設に滞在中は家族の再生、そして/または、できるだけ早い時期での再統合を確実にするためにケース・マネージャーとプログラムスタッフとともに取り組む。ケース・マネージャーが地域資源を使って、帰宅後に適したサービスが受けられるように支援する。

共通理念

- ・ 子どもの権利を守る
- 子どものための高い基準の教育、ケア、治療を推進する
- 子どもとその家族およびコミュニティ間の関係性を支援し、保護する
- ・ 家族システムを子どもが最もうまくやっていけるものとして受け入れる
- ・ 子どもと家族ができるだけ早い時期に健康的な再統合を促進できるよう全力をかけて援助 する
- ・ 人種、民族、性別、年齢、性的指向、障害、宗教、国籍に関係なく、子どもと家族の為の 資源として存続する

研修内容



Jamaica Plain (ジャマイカ・プレイン) の富裕層の大きな家が並んでいる静かで安全な地域に広い土地を所有し、オフィス、居住施設(寮)、チャペル、学校、ガーデン、プール、バスケットボールコート、広場がある。1918年、インフルエンザの流行でボストンのノースエンドに住む親の多

くが亡くなり、子どもだけが残された。St. Leonard's Church の O.F.M の牧師 Antonio Sausa 神父がノースエンドに住むイタリア系アメリカ人の子どもたちのために児童養護施設 the Home for Italian Children(ザ・ホーム・フォー・イタリアン・チルドレン)を始め、チャリティ活動で得た資金で 1920 年にジャマイカ・プレインの Gahm Estate(ガム・エステート)の土地 10 エーカーの牧場を購入。修道女 Mary Valentina が 6 人のメンバーとともに運営を任され、1921年2月10日に30人の4-14歳の女児を養護施設に迎え入れたのが最初で、1929年には男児も受け入れるようなった。インフルエンザが収まった後は、人種や宗教に関係なく、虐待やネグレクトされ、家庭や行動に問題を抱える子ども達も受け入れるようになり、1960年代初頭には、社会福祉士の専門的サービスや、精神科医や先生によるコンサルティングも行われるようになった。政治的・社会的背景が変化したことを受け、1974年にThe Italian Home for Children に改名。1970年代中旬までに情緒的な問題を抱える子どもの臨床サービスを行う全寮制治療センターとなった。ここで全ての教育サービスが提供できるよう 1990年初頭に Mary SavioliPallotta Educational Center(メリー・サヴィオリパロッタ教育センター)を設立し、2000年には East Freetown(イースト・フリータウン)での全寮制サービスを開始。

Lima 氏とディレクターの Stephanie 氏が活動の内容について説明し、その後住居施設と学校を案内してくださった。近所で施設のことをよく思わない人もいて、大変なこともあり、ご近所

との関わりは少ない。1年以内の長期滞在、および 10 日程度の短期滞在のための居住施設があり、多くは州から法的監護のため預かっている。24 時間 250 人のスタッフで 100 人以上の子どもたちのケアを行っている。子どもたちを家族に戻すことが最終目的であるため、家族に対するケアも大事だと感じ、そのためのプログラムを考えているということであった。子どもを愛しているのに、どうケアし対応すればいいのかわからない親が多く、子どもが施設にいる間にそれが学べ、子どもと良い関係性が作れるように、例えば、母親が食事を作って一緒に時間を過ごせる場所を提供するなどのプログラムを検討していた。また、親が数日だけ子どもを預けて精神的な余裕が持てるようなサポートもしている。それぞれの子どもたちが当施設に移される前まで通っていた学校に通うことができる。市がスクールバス代を負担している。1 年以内に子どもがもとの家庭に戻ることを考えたプログラムとしてよく検討されている。アメリカならではの特徴である宗教の問題についてもよく配慮されており、例えば、クリスマスを祝うことのない宗教の子どもが取り残されないように、異文化間イベントとして、様々な宗教の儀式を取り入れたり、様々な国の料理をとりいれた食事を用意したりしている。

近年は感情障害や発達障害の子ども達のケアが中心で、家族と暮らしている子どもたちが様々な理由で通常の学校に通うことができず、1 クラス 10 人程度の小人数制で、より個々のケアにフォーカスした本校に通っている。セラピストや世話役が先生と協力して、心や発達上の問題を解決するためのプログラムのみならず、自分の学校に戻ってからも授業についていけるような課題を実施している。楽しみながら学ぶという



ことをモットーにしている。また、資金の多くは寄付金であるため、リサイクル品を使っているのだが、様々な工夫をしていた。子どもたちが皆から見放され、取り残されたと感じないように、普通の生活ができ、相応の扱いを受けていると感じられるよう考慮して十分な配慮をしていた。また、家庭でのニーズに答えるべく、訪問ケアも新しく実施している。

子どもだけではなく、両親に対しても精神面の配慮が行き届いたプログラムや対応を心掛けている。また、そこにとどまらず、多くの子ども達が楽しく生活できるように、様々な可能性を考えて、クリエイティブなアイデアを出し、実践している。

GLOBALGIVING

(グローバル・ギヴィング) CEO: Ms. Mari Kuraishi www.globalginving.org



活動目的と内容

グローバル・マーケットにおけるアイデア、情報、助成金と慈善事業を民主化する資金に大きな変化をもたらし、肯定的な変化をもたらす人々の潜在能力を開放することを使命とし、世界中の社会企業家と非営利団体にコミュニティの改善のために必要な資金を集める機会を提供するチャリティ資金調達ウェブサイトである。プロジェクトの検索と厳しい吟味の実施、プロジ

ェクトリーダーへのトレーニングと支援の提供、そして寄付者を魅了し、革新的で有益なウェブ拠点の維持を行っている。2002 年以来、297,973 人の寄付者から 74,941,949 ドル集め、6,855 のプロジェクトを支援してきた。

共通理念

- ・ Always Open 常に素晴らしいアイデアに開かれている
- ・ Listen. Act. Learn. Repeat. 新しいことに挑戦し続け、失敗は素早く生産的に、データやフィードバックを活用し、進むべき道を行く。
- Never Settle 常に進化する
- ・ Committed to WOW 参加者がわくわくするような、素早く情熱的で専門的な対応

研修内容

1997年に世界銀行に勤めていた Mari Kuraishi 氏と Dennis Whittle 氏が貧困を食い止めるための革新的な方法を開発するよう依頼を受け、世界中の人々が世界銀行の助成金を得るために競合する今までで類を見ないイベント、世界銀行開発市場を創設した。これが成功をおさめ、参加者から実際の市場が求められ、年間を通してオープンし、バーチャルで運営した。その後、2人は世界銀行を退職し、GlobalGivingを立ち上げた。始めた当初は NPO 法人は集まってもそこに資金を投入するための提供者を募るまでかなりの時間がかかり、最初の2年は全く収入がない状態でスタッフに給料が支払えないこともあり、システムが機能し始め、経営が安定してきたのは8年後くらいだとのことだった。自分のヴィジョン、信念、可能性を信じて積極的に活動してきたが、無理かもしれないと感じたことは何度もあり、でもあきらめずに頑張ってきた、その力は素晴らしいと感じた。努力をしていてもタイミングや運も大切だという言葉に、過去に様々な活動で功績を遺した人々が同様の経験をしていたことが思い出された。今までにない新しい道を切り開くのはとても難しい。IT という世界をつなぐツールを上手に活用しつつ、他とは異なるGlobalGivingのブランド化にも力を入れており、多くの人の関心を引き、資金集めを行う上で大切であると感じた。25人ほどのスタッフで500以上のNPOを支援できているのは、スタッフー人一人が目標に向かってそれぞれのやり方で異なるプロセスを踏んで活動していて、Kuraishi

氏がスタッフ全員を信頼していて、彼女がミーティングに参加していなくてもまるでいるかのように話が進んでいたという話をきき、皆が自主的に活動していることがわかる。理想的だが、なかなか難しいことであり、これを実践できている本団体は本当に素晴らしいと思い、感激した。



文責: 谷岡理香

研修日: 2012年9月24日(月)-28日(金)

ELLIS MEMORIAL / ELDREDGE HOUSE

(エリス・メモリアル)

CEO: Mr. Leo Delaney

www.ellismemorial.org



活動目的と内容

現在では、乳幼児教育、青少年教育、高齢者と障害者教育を3つの大きなプロジェクトとして活動しており、それぞれのプログラムに117人の乳幼児、91人の小学生、35人の高齢者(や障がい者)が参加している。参加費用は(親の)収入によって異なり、低所得者には便宜が図られている。活動を支えているのはパートタイムを含む62人のスタッフである。

研修内容

目的:

- 女性管理職の仕事の仕方について学ぶ
- アメリカにおける非営利組織と行政との関係について理解を深める
- 非営利組織におけるボランティアの役割について理解を深める
- 財務戦略と資金調達について学ぶ

1月目

第 4 週は、Ellis Memorial での研修である。改装した 3 階建ての建物に移ったばかりで、研修 初日はグランド・オープンという記念日である。 1885 年設立という伝統あるこの NPO の CEO である Leo Delaney 氏は 1986 年から CEO を務めている。



初日は、CEO の Leo から、組織図を基にこの組織の構成について、細かい費目が書かれた年間予算表と年間支出表を見ながら運営費用の流れについての説明を受けた為、組織の全体図を把握することができた。86年には年間予算が75万ドルであったこの組織が、今日では350万ドルという規模に発展しており、彼が資

金調達のエキスパートと言われる所以である。組織運営は、個人の哲学とは別次元で、誰とどのように付き合って行けば組織運営に有効かを常に考えることが重要だと Leo は語る。

しかし彼は単なる資金調達のプロではない。86年当時はこの界限は荒れた地域であり(時代としては、公民権運動の後、比較的裕福な白人が郊外に出ていき、低所得層のアフリカンアメリカンが街に入って来た頃か)、Ellis Memorial も解体寸前であったが、彼は諦めることなくこの組織と建物をコミュニティ再生の要となるよう心血を注いだ。その背景には、若い頃、彼自身が学校をドロップアウトし、すさんだ生活をしており、そうした時に一人の女性カウンセラーに出会い、自尊感情を取り戻すことができた事で立ち直ったという事情がある。こうした自身の体験が、

地域のすべての子ども達に豊かな教育環境を与える活動に向かわせている。語り口は穏やかだが、何かをするなら、情熱を持て、そして困ったときは周囲に助けを求めろと言う Leo の言葉は素直に聞く側の胸に響く。どんなに貧しくても、家族に恵まれなくても、支えてくれる人が周囲にいれば、子どもたち、そして大人も夢を抱いて成長できることを彼は身を持って教えている。

午後、ボストン市長と企業が合同で主催する助成金贈呈式典に Leo と共に参加。新しいビルの建築に当たり、デベロッパーが地域へ還元するために助成金を提供するというもので、ボストンでは通常の事のようだ。助成金を受けるのは Ellis Memorial の他 10 組織で、その中に先週訪ねた Women's Lunch Place(ウィメンズ・ランチ・プレイス)の名前があり、責任者の Shalon に再会した。企業から地域への助成金というスタイルに馴染みがない者としては、多少戸惑いはあるが、今後こうした共同事業は日本でも見られるようになるのかもしれない(ひょっとすると既にどこかの自治体で取り組んでいるところもあるのだろうか)。

夕方5時から新しい建物のグランド・オープンセレモニーに参加。ボストン市長が主賓としてのスピーチを行い、地元テレビ等のメディアも取材に訪れていた。新しい Ellis Memorial 内の教室を見て回る。それぞれに趣向が凝らされた教室は、子供たちも気に入っているという。よく見るとすべての教室入口のプレートに寄付者の名前が書かれている。例えば、幼児教室2はフィッシュ・ファミリーー財団の名前が、就学前教室1はステイト・ストリート銀行、という具合である。企業名が教育施設のプレートにあることに、また、主な資金提供企業の名前とロゴが建物内中央の壁に目立つ形で張り出されることに再びカルチャー・ショックを感じたが、これがアメリカの寄付文化





カルチャー・ショックを感じたが、これがアメリカの寄付文化(或いは還元)の一つの形なのだろうと考える。

アメリカでも非営利団体の給与は高くないようだ。それでも、学士、時には修士の資格を持つ職員を採用している。Leo は言う。「利益を求める企業は、経済が悪化したらそれで終わるが、ここでは、お金以外の付加価値があり、仲間と分かち合えるヴィジョンがある」これまでの研修でも感じることだが、リーダーの言葉には力があり、私たちをインスパイアする。

2月目

2012年9月25日(火)7:30-9:00

8th annual Women Who Care a leadership Breakfast by American Red Cross

研修が始まる前の時間を利用して、Ellis Memorial から程近いシェラトンホテルで午前7時半より開かれた、赤十字主催の女性のリーダーシップ朝食会に参加。参加者が約500名、司会は地元テレビ局の女性アンカーが務めるなど、米における女性のリーダーシップの実績を実感する朝食会であった。

研修2日目午前、Ellis Memorial の大人の為のデイケア施設を訪ねる。この施設では35人のクライアントと呼ばれる利用者を看護師やソーシャル・ワーカーを含む6人のスタッフでケアしている。基本的に医療ケアが必要と認められた人々の為のプログラムである。このプログラムに

28年前ボランティアとして参加し、現在では責任者を務めている Beverly Mahaffey 氏に話を聞いた。

毎日参加するクライアントがほとんどである。一日の基本的な流れは、午前7時半頃にそれぞれが到着し、朝食を取った後は絵を描いたり、ゲームをしたりして自由に過ごす。10時過ぎに、建物の中を少し散歩する。(歩くのが困難な場合も



あり、訓練も兼ねている)。その後 11 時から、音楽に合わせた体操やスポーツなど、日替わりで 色々なメニューが組まれている。昼食は、栄養を考えた温かい食事を心がけているという。週に 一度は、子ども達が一緒に遊ぶ為にやってくる。セラピーに有効と言われる犬も週に一度登場す る。更に、学校の夏休み期間には、子ども達が週に 2 回、火曜と木曜にインタビュー技術を学ぶ 時間として、クライアント達にインタビューをして記事を書くという。また、数ヶ月に一度は買 い物に行き、美術館に出かける。(ちょうど私たちが訪れた次の日が皆で買い物に出かける予定で メンバーから「楽しみにしている」という声を聞いた。)低所得の為に仕事に追われる日々を送っ てきた人の中には、音楽や美術といった文化に触れた経験がない人もいるという。

ボストンにも独居老人はいる。一人きりの部屋でテレビだけを見て誰とも話さず、不安と孤独と失意の中で偏った食事をしながら暮らしていても、その場から出ようとしない人もいる。それらの人々をソーシャル・ワーカーや友人などが Ellis Memorial に誘って、社会の一員として活動できるように支えている。また、住居費は無料だが食事は提供されない Rest room からここに通っている人もいる。単身者が多く、このプログラムに参加することで、public speaking(公の場での発言)ができるようになるという。天気の話、趣味の話、子どもや地域の話、何気ないようでいて、そうした会話を交わすことで、自分は一人ぼっちではなく、コミュニティの一員であることを実感する。幼い子ども達と話をする事も地域における世代間の関係作りであろう。私たちが訪ねた日、ダンサーの名残がある美しい身なりの 90 歳を越えた女性が、数回だけ叫び声を上げた。その時、周囲から「大丈夫よ」という優しい声がかかる。また、何度も私たちに握手を求めてくる男性に対しても、さりげなく注意をしている。長い人は 20 年参加しているプログラムだと聞くと、この場所が一つの大家族のようなコミュニティになっていることを実感する。

経済の悪化で政府の補助は減り、かつ3ヶ月毎に医療保護を求めるための証拠資料を提出しなければならない。書類作りは膨大であり、運営も決して楽ではなく、不足分を助成金などで賄っている。クライアントが元気に過ごしてくれることがゴールであるというBeverlyに、今後の個人の夢は何かと聞いたら、定年してこのプログラムのクライアントになることだと目を細めた。

午後から、Leo,並びにボランティア募集の担当者である Lindsay からボランティアプログラムマネージメントについての話を聞く。ボランティアは週に 30 人程度が参加している。ボランティアに対する説明会も行っているが、特にボランティアのための訓練は行っていない。幼児教育に定期的に長く関わるボランティアには、学歴、職歴以外に、身長、体重、目の色、出生地、ソーシャル・セキュリティ番号、母方の苗字、更に過去7年の居住地など、社会的バックグラウンドに対して、綿密な調査を行っている。高校や大学からインターン生も来る。公立高校では社会奉仕が義務化されており、4年間で50時間のボランティアをすることが卒業の条件となっている。

Ellis Memorial では数々の企業とボランティアパートナーシップの契約を結んでいる。ボストンでは、social responsibility(社会的責任)として、1年に1~2回のボランティアの日を設けており、多くの企業がコミュニティに対する還元活動としてこうした制度を持っている。例えば、



2月14日のTeddy Bear Valentine に、子どもたちと飾りつけを してくれるボランティア 20名を募集したり、6月の父の日に T シャツに絵を描いてプレゼントする企画では、子ども達をサポー トしてくれるボランティアを募ったりという具合である。しかし、 単に企業からその都度ボランティアだけを募るのではない。一企

業に対して各イベントにかかる費用の寄付の依頼と共に、ボランティア募集の年間予定を提示するのである。企業の経営者にしてみれば、CSR(企業の社会的責任)というブランディングに役立ち、社員もまたボランティア活動を行うことで、フィランソロピー活動に達成感を覚えることであろう。Leo のボランティアに対する考え方は、「個人にはボランティア活動を通して make difference をした(変化をもたらした)という達成感を味わってほしいし、企業の支援は、コミュニティに対するお返しである。」こうした揺るぎない信念が、数々の申請書類を書くエネルギーになっているのだろうか。

また、高校生と小さな子ども達が交わることを、「small cultural changing (小さな文化交流)」であると Leo は言う。そのボランティア活動もまた make a difference であると。Make a difference は、日常的に出来ることも含むようだ。

夜は、待望のレッドソックス観戦である。この日は 2004 年のワールドチーム優勝メンバーが、ボストン観光名物のダックツアーバスに乗って球場を周り、ファンにボールをプレゼントする等、特別の日のようで、会場は大いに盛り上がった。残念ながら試合は負けたが、3 週間あまりのハードな研修の緊張か



ら久しぶりに解放された感がある。Leoからは土産物店での集合時間の確認、大きな球場の中での注意事項など、修学旅行にやってきた教員と生徒のような関係であるが、彼の責任感からであるう。彼自身、Ellis Memorial の移転初日のオープニングデーと研修初日が重なり、神経を使う日々が続いているはずである。一日の相当の時間をJWLIのフェローの為に割いてくれている事に改めて感謝する。

3 月目

Leo とこの日のスケジュールを確認した後、青少年教育担当の Rachel から子ども教育についてのレクチャーを受ける。EllisMemorial は、現在 5 歳から 12 歳まで約 100 人の子ども達の放課後教育を担っている。授業が終わる時刻は学校によって異なるが、通常平日の午後 2 時頃から教室に来て自由に過ごした後、午後 3 時から宿題の時間、午後 4 時半~5 時半は、年代によってプログラムを工夫しており、体育館でフィットネスや体操をしたり、物語を聴いたりする時間もある。5 時半~6 時は補講時間となっている。

特徴的な事は、学校が休みの間もこの施設は開いており、夏休みの4週間、年末年始、更に祝 日も対応しているところである。働く親にとっては、こういう場所があることは大きな安心であ ろう。

障がいのある子どもも受け入れている。また、親自身が問題を抱えているケースもあり、そういう家族へのサポートプログラムに対して、政府から Ellis Memorial に補助金が出ている。子ども達の放課後の様子を把握しており、地域の情報も持っているため、学校の教師たちとメールや電話等で情報を共有しているという。

放課後教育は子ども 13 人に対して、教師が一人という手厚い環境であるが、運営費は政府の補助と親からの月謝だけでは賄いきれず、その差額を財団からの助成金や企業とのパートナーシップによる助成によって補っている。初日に Leo が語っていた、組織運営にとって重要なパートナーである政府や企業、財団と良好な信頼関係を築くことが重要というコメントが思い起こされる。この放課後教育は、これまで建物の地下が主な活動場所であったが、乳幼児クラスが新しい建物に移動したため、使用できるスペースが増え、指導者も子ども達も喜んでいるという。

Rachel に、小学校で教える事と Ellis Memorial で教える事の違いについて尋ねた。実際には、小学校の教師になるのは資格が相当厳しいという現実もあるようだし、資格を持った教師をこの組織が雇うことも給与面で難しい。それでも Ellis Memorial の教師は地域の中の存在であり、学校教師に比べ目に見える待遇は異なるものの、連携して子ども達を育てている実感があるという答えが返ってきた。

生後1ヶ月から就学前の子ども達の初期教育プログラムの 責任者は、Maria Texeira 氏である。乳幼児を年代別(月別) のグループと個人別の発達段階に分けてプログラムを組む。 食べること、歩くこと、発話ができるようになること、すべ てが人間となるための教育である。若い親達自身の食事が偏



っていることもあり、親に対する食育知識などもプログラムに組み込まれている。障害のある赤ちゃんも地域の一員として受け入れている。感銘を受けるのは、乳幼児の段階から、子どもの人格を尊重し自尊感情を大事にしていることである。障がいのある乳幼児も自分なりのコミュニケーション方法を確立していき、それを周囲の幼い友達が支えている日常があるという。日本の子ども達が、諸外国に比べて自尊感情が低い背景には、こうした小さい頃からの教育も関わっているのだろう。個人よりも集団生活の規律が重んじられる傾向の強い日本の教育との根本的な違いを見る。

また異なる文化や習慣を持つ親が多くいる中で、異文化を共有すること、多様性を尊重することも教育目的の一つだという。それは食事にタコスが出たり、ナイジェリア出身のお母さんが美しい民族衣装を着て来たりする日常の中での教育である。更に、こうした乳幼児を育てることは、地域の人材を育てているのだという自負がスタッフにある。政府の補助金は年々カットされ、企業とのコラボレーションによるイベントからの寄付や助成金などで賄っているが、こうした長期にわたる人材育成の視点に Ellis Memorial の存在意義を学び、Leo のコミュニティ形成にかける思いの強さを学ぶ。

ランチの時間に子どもたちの部屋を訪ねた。全員が自力で食事をしている(日本の保育園では、スタッフが乳幼児の口にスプーンを運ぶ事も「普通」である)。既に自立している。発話ができない子どもも、ジェスチャーで自分の意思を伝えられるような教育、更にそれを大人が受け止めることで、このような幼い子どもたちでも、自分が認められていることを実感するのだろう。それは大切な自尊感情である。ここは地域の人材教育のスタートの場所であるという Maria の言葉に納得する。

ボストン郊外の Dorchester (ドーチェスター) 地区に移動して、Leo が議長を務める MADCA (Massachusetts Day Care Advocate) の贈賞式に参加する。会場となった College Bound Dorchester (カレッジ・ボンド・ドチェスター) は、Ellis Memorial 同様の NPO で、教室では子ども達が小学校に入る前の初期教育を受けていた。(英才教育ではなく、社会的に生きていくた

めのスキル、基礎的な読み書きと共に、情操教育を柱としている。)地域の子どものみならず、大人も含め、大学進学を目標にしている。それはより良い人生を送るためであり、教育による街作りという長期展望に基づいている。



表彰されたのは、マサチューセッツ州下院議員の女性 Linda Forry 氏で、初期教育への投資を訴え、昨年、同僚議員 70 名の署名を集めた事が贈賞理由である。(彼女自身も昨年出産している。)子ども達の歓迎の歌で始まった贈賞式は、親たちも見守る中、アットホームな雰囲気で行われた。フェローも、子ども達と共に過

ごす時間を持つことができた。このように政治家と繋がっている事も、地域の教育には重要なことであろう。NPOによる地元の政治家の表彰(又は感謝状)は、日本のNPOも取り入れられる発想かもしれない。Ellis Memorial 以外の、しかし同じ活動をしているNPOに触れることで、未来を担う子ども達を地域が育てていくという長期の展望を持つNPOの活動と連携が、コミュニティ発展の重要なファクターであることを学ぶ。

4 日目

この日は資金調達の担当でもある Brown から助成金について学ぶ。既に述べているように Ellis Memorial には行政の補助が出ているが、運営費全体を賄う為に財団や企業に助成金を申請している。Brian が Ellis Memorial に来た当初は、企業は、助成金は企業への見返りがないと捉え関心を示さなかったが、時代は変わり、企業が地域に対してどのような貢献をしているのかが 問われる時代になった為、今日では多くの企業が NPO に対して助成金を提供している。



企業に助成金を申請する際のポイントは、その企業のガイドラインを 注意深く読むことである。申請する NPO 等の組織の規模によって企業 が提供する金額は異なる。企業によっては高額の助成金を大規模な非営 利組織のみに提供するところもあるという。Brian によれば Ellis Memorial の予算は、州内の大学や病院等の非営利組織予算と比較すれ

ば規模が小さい為に、助成金を提供してくれる財団や企業を探す場合も、マサチューセッツ州全域から探すのではなく、地元であるボストン市内の財団を主に当たっているという。これまでに接してきた NPO の中で Ellis Memorial は最も規模が大きい為、意外な感はあったが、冷静に考えれば全くその通りであろう。

日本とも共通する点は、助成金申請書の書き方である。なぜこの財団に申請するのか、自分の組織の特徴と申請に値する理由を明確に書くことである。日本と大きく異なる点もあった。助成金を提供する企業が、希望する NPO 等を対象に説明会を開く事もある。また、1 社だけでなく、中間組織が仲介して、資金を提供する企業と助成金を受けたい組織の代表が話し合える場を提供することもあるという。助成金を有効に使う為の集団見合いの場とでも言えるだろうか。この場所で、NPO側はインターネット上に掲載されている以外の情報を得る事もある。例えば、「締め切りの1ヶ月前までに助成金の書類を提出しているほうが望ましい」等と直接教えてもらうこともあるそうだ。また、初めて申請をして、残念ながら助成金を獲得できなかった場合、その理由を当該企業に尋ねるという。理由を尋ねた上で、次回の申請時にはその点を補うことで助成金を確実に得るステップを踏んで行く。アメリカの開かれたシステムのあり方を見る。この後、実際にパソコンを使って、ボストン市内の財団などの探し方の指導を受ける。





活動

現在のセンターは 2005 年に設立。機能としてはそれ以前からあるが、コミュニティ・ベースの行政機関の必要性が高まり、様々な組織が統合されて現在のセンターとなった。具体的には、DV、性的暴力、子どもへの虐待、人身売買の 4 つの分野の 15 の異なる agency (それぞれの分野の NPO、病院、ボストン警察)がこの建物に入っており、センターが被害者を守るための統括部署となっている。



Leo の車で、Commonwealth 通りにある Family Justice Center に向かう。センターの所長を務める Anne Marie Delaney 氏より概要説明。建物に入っている6つの agency (団体)の責任者から各15分という短い時間ではあったが活動についてレクチャーを受けた。

O Gay Men's DV project

マサチューセッツ州は全米で最も早く同性結婚が認められた州である。この団体の活動はゲイが主な対象ではあるが、レズビアン、バイセクシャル、トランスジェンダー、クイア等の性的少数者全般の相談にも乗っている。州内に3つの支部を持ち、24時間国内どこからでも通話可能なホットラインを設けている。電話で近くの警察、agency を紹介した後、その agency の advocate (アドボケイト)やケース・マネージャーが対応に当たる。DVの中の項目の physical abuse (身体的虐待)、sexual abuse (性的虐待)、emotional abuse (精神的虐待)の他に、financial abuse (経済的虐待)、cultural /identity abuse (文化的/アイデンティティ虐待)という表記がある。金銭面で脅迫し財産を奪おうとする虐待や暴力は、確かに男性に主に起こるケースだろう。また自身の民族的コミュニティから隔離され、常に英語を話す事を強制されることも、多民族国家における虐待・暴力であろう。24時間、匿名のまま相談を受ける事ができる。ソーシャルメディアの発達した今日では、フェイスブック等に実名がでることで、加害者に居場所を突き止められる為、匿名であることは大事な要素であるとのこと。被害者に安全な環境(シェルターや住宅)を提供し、低収入のサバイバーに対して法律に基づくアドバイスや弁護も行っている。

OMy Life, My Choice

2001年、ボストンの17歳の少女が人身売買の犠牲となり死亡したことをきっかけに設立された比較的新しい人身売買に関するNPOであるが、この組織が行う10週間の活動グループモデルはミネソタ州、イリノイ州、カリフォルニア州で模範事業となっている。アメリカ国内での人身売買と、国外からアメリカに売られてくる両方のケースを担っている。近年「仕事」と騙されて海外から売られてくるのは東南アジアやウクライナ、ロシア、そしてエルサルバドルの少女が多いという。国内で人身売買のターゲットになっている平均年齢は12歳から15歳の少女である。学校や子ども達のたまり場という現実の場よりもインターネット上のバーチャルな空間で騙され

て売られるケースが増えている。見えにくい空間であり発見することが難しくなっている。更に毎年、国内で人身売買の犠牲となる可能性がある若者の数は 15 万人から 30 万人と推定されている。看過できない数字である。人身売買の犠牲になった少女達は、心に深い傷(トラウマや PTSD)を負っている上に、被害者は自分自身の責任と思う傾向がある為、心の回復は重要な教育プログラムである。「少女達の人権擁護の砦でありたい」と語る若き責任者 Lisa のリーダーシップに尊敬の念を抱く。

パンフレットに掲載されている被害者グループ活動に参加した少女の声を紹介しておく。

"Today was great day in girls' group; I remembered all the memories, and how strong I am, and how keep my head up. I know it's not my fault and I'm not alone."

(今日は女子グループ活動において素晴らしい日だった。研修中の事は全て覚えている。私はとても強くなった。下を向くことなく顔を上げて生きている。今では私は悪くないことがわかったし、私は一人ではないことも知っている。)

OChildren's Advocacy Center

虐待を受けた子どもたちを守るセンターで、実際に部屋を回りながら説明を受ける。チームで活動しており、市政府や病院、警察とも連携している。(性的虐待を含む)虐待を受けた直後の子どもの診察を行う診察室は、人気プロバスケット選手の大きな絵が描かれ、天井にも気持ちが落ち着くような飾りが施されている。ここで身体的チェックだけでなく、子どもの目を見たり、全体の雰囲気からも症状を確認するようにしている。身体内診察の際には、子ども自身もパソコンに映し出される内視鏡の画像を一緒に見ることで、自分の体についての情報を共有する。

Sexual Assault Evidence Kit と書かれた道具箱のような箱の中には、性的虐待の証拠をチェックするための器具が可愛い絵柄の薬袋のような袋に入れられている。(時間の都合で直接中身を聞くことはできなかったが、ホテルに戻り、この被害者用キットについて調べたところ。一般的には身体的傷、口内、生殖器、直腸



など、体に残された証拠をチェックし消毒を施す為の道具が入っているようである。) 11 歳以下と 12 歳以上では箱は異なるという。

子どもがどのような虐待を受けたのかを聞き取る為の部屋が2つ設けられている。落ち着く雰囲気の部屋で、録音をしながら子どもの話を聞く。録音することは本人にも伝えられる。その目

的は、異なる担当者に何度も辛い話をすることを避ける為である。インタビューは心理カウンセラーが行い、マジックミラー越しに警察や医療関係者等が同席して話を聞いている。多い日には1日3件のインタビューが行われるという現実に胸が痛む。



OMa Alliance of Portuguese Speakers

Domestic Violence Advocate の Dulce よりレクチャー

ポルトガル語はマサチューセッツ州で2番目に使われている言語であり、こうしたNPOが重要になっている。市民権獲得の為の支援や英語教育等、数多くの活動を行っているが、女性への暴力防止に関する活動の柱は、クライアントを守るadvocateを置く事(1対1でクライアント

をサポートする)、コミュニティ全域での支援活動に広げる事である。ドーチェスター地区の美容院には、ポルトガル語を使う顧客が多い。美容院は女性だけで個人的な話がしやすいところであり、こうした美容院も、地域に暴力にさらされている女性がいないか等の情報を得るネットワークの一つになっている。

OBoston Area Rape Crisis Center

Medical Advocacy coordinator の Asha によるレクチャー

1973年に設立されたボストンで唯一のレイプに特化した NPO で、マサチューセッツ州内でも最も古く、かつ規模の大きい組織である。正規スタッフが 30 人と 150 人のボランティアによって運営されている。活動資金の半分は政府から、残りの半分は助成金や寄付によって賄われる。24 時間レイプ被害者からの電話に対応し、医療ケアも 24 時間行う。サバイバーに対する個人及びグループカウンセリングという被害者対応と共に、防止策についても他の組織やコミュニティと協力し力を注いでいる。2009年に司法省 OVC(Office for Victims of Crime)より"National Crime Victim Service Award"を受賞。

OBoston Police Department

ボストン警察の Domestic Violence Unit の責任者である、Mark Harrington 氏と Sexual Assault Unit の George Juliano 氏から話を聞く。ワイシャツにスラックスというサラリーマンのような出で立ちではあるが、腰にはピストルを携帯している。このような担当部署があることに一同驚いた為、その点を尋ねたところ、彼ら自身も戸惑いがあったようだ。警察では薬物や銃による事件など解決すべき問題が山積している上に、更に新たな担当分野を抱えたように感じているようだ。警察には長年にわたる警察ならではの文化があり、看護師、NPO等の他の組織にはその組織が持つ文化があり、この Family Justice Centerで他の機関と協力して仕事を行うのは、楽ではないようだ。しかしながら、警官はルールに則って活動することが任務であり、DVを取り巻く環境が社会問題となった今、これまでの犯罪とは異なる対応が必要なことは理解しているという。「ピストルで解決してきた犯罪」とは異なる「新たな犯罪」に対する戸惑いを率直に話してくれた事には感謝したい。

最後に再び責任者の Ann から、今年の年間テーマプロジェクトが人身売買であり、駅のゲートにポスターを貼って啓蒙活動を行っている話を聞く。(何をテーマにするかは定期的な総合ミーティングで決める。) 人身売買の情報交換がアンダーググラウンドで行われ、少女達の無邪気な好奇心が人身売買の罠にかかるケースが増えている。通信企業の協力も仰ぎ、怪しいメールや電話のやり取りなどの情報をチェックしているという。日本においても、これまでタイ等からよい仕事口があると騙されて、パスポートを取り上げられた状況で、売春を強制されるケースが数多く報告されているが、社会問題として広く共有されているとは言い難い。今後、ソーシャルメディアを介したこうしたケースは、国境を越えて日本の少女達が被害者になる可能性を含んでおり、危機感を覚える。貧困を原因としない、少女の幼い好奇心を利用した新たな人身売買は増える可能性が大きい。アメリカでのこのような事例を日本の教育機関が知ることも重要であろう。

この後、放課後教育に参加している子ども達の様子を見るために、Ellis Memorial に戻る。5 歳から9歳までの子ども達が宿題に取り掛かっている。Lachel が新たに来た子どもたちにおやつ

を出す傍らで、宿題がわからない子ども達から次々と質問の手が上がる。その都度、理解度を高める為のヒントを出している。宿題を見せてもらうと、例えば、Pのつく単語(pen や piano)を 10 個書き出したり、1 から 10 まで、或いは理解度の早い子どもは 100 までの数をノートに書いたりしている。フェローも少し宿題のアシスタント・ティーチャーとして参加させてもらった。

[参考]

アメリカでは 1994 年に女性への暴力(家庭内暴力、性的暴力、ストーカー等)防止法が成立しているが、その後も増え続ける女性被害者数を背景に国政レベルでの行政改革が行われ、ブッシュ政権時の 2003 年には司法省内に女性への暴力対策局 OVW(office of Violence against Woman)が誕生。The Protect Act が整備され、住宅援助プログラムも組み込まれた。2005 年に全米で行われた女性の暴力ホットラインには 100 万件の相談があったという。同年、女性への暴力防止法が改定(ブッシュ大統領の署名は翌 2006 年)され、新たに子どもや、若者、男性も保護対象に加わった。2005 年には初めて OVW に助成金制度も誕生している。(http://www.ovw.usdoj.gov/docs/history-vawa.pdf)

<u>5 日目</u>

研修最終日を迎え、1週間の総括。研修でわからなかった事等の確認を Leo と行う。子ども達の教育プログラムの組み方、発達レベルの確認方法、教師の評価方法等の質問が出て、それらひとつひとつに対して実際に使用している評価表等の資料をコピーした上で詳しく説明してくれる。私自身は、昨日訪れた Family justice Center が市の行政組織のどういう所に位置するのか、行政組織の全体図が把握できていない為、その点を質問した。Department という英語は日本では「局」を指すように思うが、ボストンでは、市長職の下に、日本の局にあたる数々の commissionがあり、その下に department があるという。つまり department は日本の「部」に相当する。Family Justice Center は Health Commissionの下部組織である Department 内にあることが理解できた。(来年以降のフェローの為の記しておくと、渡米前に、ボストン市のWebサイトで、行政組織全体を把握しておくと理解が早いと思われる。当日はその組織単体についての説明が行われるため、それがボストン市の特色なのか、マサチューセッツ州全体の基準なのか等、その位置づけに戸惑う事があった。)

Leo から、実際の企業に申請した助成金申請書類を渡される。それらの書類は以下の事が示されている。一自分たち(Ellis Memorial)は何者であるか、なぜ、この企業に助成金を今回申請するのか、数々の申請者の中で自分たちに助成金を与えることの意味、(Ellis Memorial の独自性と社会への還元度)である。この申請書には、今後フェローが申請書を書くために必要な事の全てが包括されていた。それは実務上の情報を超えて、子どもたちへの教育を通してコミュニティを発展させていくという、Leo 並びに Ellis Memorial の志の高さと暖かさを感じる内容であった。

更に、フェロー一人一人に USB メモリーが配られた。その中には、過去に Ellis Memorial が 提出した助成金の申請書、日本からでも申請可能な企業の Philanthropy grant の情報などが入っている。初日に Leo が言っていた「必要な情報は全て与える」の言葉を思い出す。フェローを信頼してくれているからこその行為であると深く感謝する。

2012年9月28日(金)15:00-16:00

一昨日表彰を受けた州議会議員のLinda Forry 氏から州議事堂見学の案内をもらい、参加することに。彼女自身には公務の為会うことはできなかったが、独立戦争前からの歴史が刻まれた州議事堂の中を見学しながら、その重厚な作りに日本の県庁との差を感じ、驚きを禁じえない。アメリカは歴史が浅いからこそか、あらゆる手段を使って歴史を記録している。建物様式、絵画、彫像、ステンドグラス等、更にそのスケールの大きさに圧倒される。巨額な費用を投じている事が窺われ、これらのひとつひとつが、アメリカ人であることを誇りに思わせる装置の一つになっているのだろうと感じる。Ellis Memorial で学ぶと感心することばかりであるが、その背景には、多民族国家であることの複雑性や、貧富の大きさがある事も見落としてはならないだろう。

約1時間の議事堂のツアーの最後で見たものが、小さなスペースに飾られた6人の女性リーダーの顔彫像である。その中に1800年代の女性参政権運動の活動家ルーシー・ストーンの名前や、同一労働同一賃金を訴えた女性の名前があった。議事堂で見たアメリカの歴史のほとんどは男性視点で描かれている。女性は男性を介護する看護師や母親のような像を除いては登場しない。しかしながら実際にはそれぞれの歴史の場に女性たちは存在していたのである。記録の重要性と共に、記録されなかった人々の存在に思いを馳せる。研修最後の日の夕方にこれらの小さな女性像に触れて、女性のリーダーシップの研修の意味を重ね合わせ、感慨深いものがある。その後、インターネットで調べると、ボストンの女性たちの歴史を掘り起こしている website (Boston Women's Heritage Trail http://bwht.org/downtown/) があった。今を生きる女性達が、女性像の設置を希望したのだろうか等と想像する。小さなスペースに飾られた6人の顔銅像は、ツアーの最後に初めて異なる視点を示唆してもいる。小さいからこそ、批判的で皮肉的でもある。

[参考]

Jackie Cambel 教授

ジョーンズ・ホプキンズ大学公衆衛生大学院(Johns Hopkins School of Public Health)教授 30 年にわたるドメスティック・バイオレンスのリサーチ、子どもの教育環境問題に関する研究 で知られ、彼女の調査によってアメリカ国内で女性の暴力に関する法律が整っていった背景があるようだ。インターネット上に彼女の論文やビデオ等も出ている。

文責:榊原清乃

研修日:2012年10月1日(月)

BOSTON FOUNDATION

(ボストン財団)

President & CEO: Paul S. Grogan

www.tbf.org

活動

1915年に設立。以来、全ての人に公正と機会が行き渡るような地域づくりを目指して資金提供をし続けている。

コミュニティの深刻な問題に対処するために、特別プログラムを策定したり、NPO に資金援助を行ったりしている。また、資金提供をするだけでなく、プログラムを実施する NPO と連携し、共に会議をして、戦略や計画を立てることも行っている。

2012年10月1日(月)8:30-10:00

The Boston Foundation による JWLI クロージングレセプション

JWLI にかかわる、スポンサーの財団、研修先の NPO、シモンズカレッジの関係者の皆様およびボストン総領事の皆様が一堂に集まり、JWLI6 期生の研修の無事の修了をお祝いいただいた。このような節目の機会を開催いただき、また、数多くのお祝い、励ましのお言葉を聞き、JWLI Fellow 一同、日本に帰国後のアクションへつなげることをより一層強く決心することのできるレセプションでもあった。



FISH FAMILY FOUNDATION

(フィッシュ・ファミリー財団)

Facilitators: Trustee/Co-founder Japanese Disaster Relief Fund Boston: Mrs. Atsuko Fish
Assistant Facilitators: Executive Director: Mrs. Tref Borden,

Program Manager: Ms. Kozue Sawame,

Program Manager of Greater Boston Citizenship: Mrs. Sher Omerovic,

www.jdrfb.org http://gbcinitiative.org/

THE FISH FAMILY FOUNDATION

活動目的と内容

1999年に Mr. Larry Fish と Mrs. Atsuko Fish 夫妻により設立される。

現在の資産は約1千万ドルで、7人の財団管理委員(Trustee)で構成される委員会により運営されている。

- ◆ 主要な投資先の分野は、以下の通り
 - ➤ Citizenship & Immigration (移民の市民権取得支援)
 - ➤ Inner-City Youth (子どもの貧困対策)
 - ▶ US/Japan Cross-Cultural Programs (日米文化交流)
 - ➤ At-Risk Women (危機に瀕する女性の救済)
- ◆ 現在投資している主なプログラム
 - Greater Boston Citizenship Initiative (GBCI:ボストン圏における移民の市民権取得支援)
 - ◆ フィッシュ・ファミリー財団により 2011 年に設立され、資金提供されている
 - ◆ 7つの団体と協働している
 - ➤ Japanese Women's Leadership Initiative Fellows Program and JWLI Forum(日本 女性指導者育成事業とフォーラムの運営)
 - ▶ Global Youth Development Travel Programs(青年海外交流プログラム)
 - ▶ Japanese Disaster Relief Fund Boston (日本災害復興基金ボストン)

研修内容

研修は以下の内容でランチを取りながら進められた。

- ◆ Larry さんによるウェルカムスピーチ
- ◆ Tref Borden さんによるアメリカの"Philanthropy フィランソロフィー(奉仕的な活動)" の説明とフィッシュ・ファミリー財団の概要説明
- ♦ Sher Omerovic さんによる GBCI の説明

躍するために有利な環境になっているとのこと。

Larry さんによるウェルカムスピーチ

JWLI のスポンサーであるフィッシュ・ファミリー財団の設立者である Larry さんより、Larry

さんの経験談や視点を交えて、JWLI 修了の祝福のことばとともに、私達含めてこの JWLI で得たことをいかし、日本の女性が活躍するために必要なことを、とても暖かく力強い応援メッセージをいただく。



日本とのビジネス経験から、日本とアメリカの女性の活躍する ための環境を比較すると、以下の2点によりアメリカの女性の方がリーダーシップを発揮して活

- ◆ 女性がリーダーシップをとることに対して受け入れる土壌があること
- ◆ 移民のおかげで多様な人種が活躍し、多様で柔軟な社会環境

しかしながら、日本の女性にとって不利な状況も変わりつつあり、特に震災復興支援活動や社会的課題解決の活動においては、日本でも女性が活躍しはじめ、リーダーシップを発揮して活躍する機会も増えてきている。よって、私たちJWLIフェローも、行動をおこして、不利な環境を変えていってほしい!と力強い応援メッセージをいただく。

また、JWLIプログラムも6年目をむかえ、研修終了、帰国後にもJWLIの経験を活かして活躍中の同窓生も増え、同窓会の存在も大きくなり、ぜひ今後に続くJWLIフェローの候補生ためにも、この経験を報告会等開いて伝聞して、より多くのモチベーションの高い候補生を増やしてほしいとのお話を頂き、私たちの研修成果を日本でもしつかり行っていこうと、各フェローは改めて心に強く思った。



"Philanthropy フィランソロフィー" チャリティ文化と NPO セクターの概要説明

Tref さんよりアメリカの発展に多大に貢献している"フィランソロフィー"精神について説明いただく。

"フィランソロフィー"とは、個人やグループによる自主的な寄付行動や、寄付や貢献活動を 行う個人や組織の分野のことを表す言葉である。"フィランソロフィー"という、日本語にはもと もとない単語からもわかるように、アメリカの歴史や宗教観から発展し、広く市民に今も根差し ている概念、言葉である。

統計上からも、アメリカが世界で最も"フィランソロフィー"文化が根ざし寄付文化が発展していることがわかる。

- ♦ GDP の 2%の寄付額
- ◆ アメリカの市民は、税引き後の所得の3%を寄付している

これらの数字は他の国の平均額よりも高い。このような"フィランソロフィー"文化をアメリカ政府も後押しして、いくつかの税制上、寄付しやすい土壌も施されている。そして、"フィランソロフィー"の寄付文化より、病院のベッド数の半分、オーケストラの95%、大学生の20%が賄われているほど浸透し、重要な役割を担っている。

フィランソロフィー"精神により、アメリカの Non-Profit 非営利分野は、160 万団体が存在し、14 億ドルの収入を得て、雇用機会の 10%を提供しているように、重要な役割を担っている。また、非営利分野に資金面、人材面で重要な役割を担っている財団は、大きくわけて、個人、企業、地域、ファミリーの4種類があり、様々な場面で NPO をサポートしている。

今回の研修先で感じていたこと、ひとりひとり、どの立場においても、それぞれの個人や団体が、社会課題から、身近な問題への解決に向けて、自主的に行動をおこし、活躍している様子を研修先で肌身に感じていたので、Tref さんのお話をきいて、いかにアメリカで"フィランソロフィー"精神が醸成され、ひとりひとりにその精神が根ざし、行動につながっているかを再認識することができ、またその発展のために、財団の重要な役割を理解することができた。

フィッシュ・ファミリー財団の概要説明

活動目的と内容の項を参照ください。

GBCI の説明

http://gbcinitiative.org/

Greater Boston Citizenship Initiative (GBCI) は、ボストン圏における移民の市民権取得支援を行っている団体で、フィッシュ・ファミリー財団により 2011 年に設立され、資金提供されている。現在は、7つの団体と協働していて、以下のような様々な活動を行っている。



- ◆ 市民権獲得のためのサポートイベント開催 (無料で参加可能)
- ◆ 市民権取得アプリケーション作成サポート
- ◆ 市民権取得時インタビュー対策
- ♦ 法律相談
- ◆ ESOL クラス

GBCI の主担当者 Sher より、まずはじめに、アメリカ大陸がヨーロッパ人によって発見されてからのアメリカの移民の歴史の概要を説明いただく。

- ◆ 1700 年~: 西・北ヨーロッパ人 (ドイツ・南アイルランドなど) 経済的成長機会を求め て移民が増える
- ◆ 1850年~1970年頃: 東・南ヨーロッパ人(ユダヤ人中心)故郷の紛争など危機回避の ためにアメリカに流入
- ◆ 1970年頃~現在:アジア・ラテンアメリカからの難民が増える

Sher さんは、ボスニアで生まれ育ったが、故郷の紛争のため、国を後にする必要に迫られ 1995



年にアメリカに渡った。そのときは、英語を話すこともままならず、市民権を得るための英語の膨大な書類を読むのも大変で、市民権を得るまでに苦労をした経験をもつ。また市民権得てからの生活面が飛躍的に充実、法的にも守られるメリットが多いことを体感し、難民たちが市民権もないままに生活していくことの苦労をよく理解できるため、GBCIにて市民権をスムーズに取得でき

る支援を精力的に行っている。Sher さんは、アメリカの移民が増えている現状について、下記の2点のメリットから、アメリカの強みと説明し、そのためにGBCIが果たす役割は重要であり、誇りとやりがいをもってプロジェクト推進している状況が短時間にもかかわらずとてもクリアーに理解できた。

- ◆ エスニックグループの多様性による文化的発展
- ◆ 移民により、起業などによる新たな仕事の機会の増大

実際、設立後1年にもかかわらず、既に1700人の難民の市民権獲得のための書類(10ページ と膨大な資料)を提出しているように、既に膨大な数の方々のサポートを行う団体に急成長して いる。

2012年10月2日(火)11:00-12:30

Closing Meeting with Patricia パトリシア教授と最後の定例ミーティング

毎週1回開催されていたパトリシア教授とフェロー4人との定例ミーティングも最終回をむかえた。これまで、このミーティングは毎週金曜日の午後に開催され、その週の研修の成果や一番学んだことを発表したり、悩みがある場合はその解決策をともに話し合ったりして、パトリシア

教授は、フェローの研修環境を快適に保つために、貴重な時間をとってくださり、私たちにとって毎回、必要不可欠なミーティングであった。

最終回の定例ミーティングでは、いつもは時間切れで聞けなかっ たパトリシア教授個人のお話、今までのキャリアパスや人生の目



的、価値観について、私たちからリクエストして話していただいた。パトリシア教授も、女性であることで不利な場面や困難を乗り越え、偶然や、たまたま廻ってきたチャンス、機会を逃さずつかみ、今に至っていらっしゃって、静かにお話ししながら内面の情熱を感じ、改めて感動した。今までの人生を一言で表現すると"Opportunities after opportunities"よ、とおっしゃったことがとても印象的であった。

2012年10月2日(火)13:00-

Closing Luncheon 歓送ランチ会

Fish Family Foundation Hosted organizations, CGO, CI at Petit Robert Bistro

(468 Commonwealth Avenue)

研修最終日のお昼、素敵なフレンチレストランにおいて、フィッシュ・ファミリー財団のホストにて、JWLIプログラムに関連する NPO、シモンズ大学関係者が参加して、6 期生のフェローのための歓送ランチ会を開催いただく。

研修でそれぞれお世話になった方々と再会し、早速色々な話の

花が咲く。そして、フェローそれぞれが、帰国後のアクション・プランを発表し、皆から拍手とエールを送られる。さらには、フェローそれぞれに送別の品が送られる。この品は、Leo さんが、毎回選ぶことが恒例となっているとのこと、その品物が何かは、あとに続く方たちのお楽しみにとっておきたい。

美味しいフレンチと飲み物を楽しみながら、あっという間に2時間がたち、いつまでも別れを惜しみながら、お世話になったすべての方々に深く感謝するとともに、この心を動かされ感動の連続の研修で感じたことを大切に、また成果を持ち帰り、帰国してからのアクション・プランの実行を約束して、解散となった。





[English Report]

From Weekly Journal by Shima Fumimoto

JWLI Fellowship Program 2012

- Weekly Journal (Sep 5 - Sep 7) -

Day 2: Sep 6, 2012 (Thu)

Web of Benefit (10:00 - 16:30)

I was nervous but excited to start the program. Ms. Crawford picked us up at the hotel at 10am and took us to her office in Needham. She explained to us that she has been lately too busy to conduct 5-days program for us, but decided to have us for 2-days after Prof. Deyton persuaded her. I was so glad to have an opportunity to spend time with Ms. Crawford.

We went through Dream Proposal which she goes over with every grantee after she explained briefly about her organization, its history, mission, philosophy, and how the granting is carried out. There are 5 dreams we talk about: Career, House, Car, Travel and Self-care, and Ms. Crawford went through one by one, giving us some hints to vision more in details. She stressed on that "every woman deserves the best and has power to do it!" It was fun and I believe this process helped us to relax more and build a good relationship with others as well as Ms. Crawford. Each fellow started to speak up more.

Then, we went through the steps to take to reach our dream in career with the guidance from Ms. Crawford. I talked about my more personal dream of career, which is different from what I submit to Prof. Deyton. This procedure helped me to come up with more practical and realistic idea. I really enjoyed to talk about own dream freely, which brought me an encouragement and a positive feeling about my dream as well as myself. At the same time, it freed our mind to be more creative about steps to take and move forward. She gave us a journal book each, and told us to take 5 minutes to write down things we are so worried about to get them out of our brain, and/or 5 things we did good about that day to be aware of worthiness about ourselves.

It was fascinating and encouraging to hear Ms. Crawford's story. We all amazed how she manages the organization both in Boston and in Chicago by herself. Now, she is known by many people after elected to Heroes of CNN, and more people got aware of what she is doing and are willing to help her. This proves me that media is very important tool to acknowledge more people about social issues now in their community and receive help and grants from more people at will through the organization's activities.

Day 3: Sep 7, 2012 (Fri)

Web of Benefit (10:00 - 14:30)

We observed the interview Ms. Crawford gave to a grantee at Catholic Charities in Dorchester, one of the poverty areas. We met an advocate of this organization, Lillian who has been working there for 25 years. She has an advocate to work on a grantee to meet her conditions before referring to her. As we arrived more than 30min earlier, Lillian and Ms. Crawford took time to explain to us about the organization and "collaboration" with donors (organizations) as well as police.

Now, 18 staffs are working under routine 24hours a day. The place was for homeless families, only women and kids allowed since men in many cases causes trouble. The Catholic Charities was not getting any grants from State because then they have to have men staying their place. The organization provide place to live, and also advocate will help mothers to get settled. To stay there, mothers have to work, do community work, or go to school for 30 hours a week.

The interviewee (also grantee) was a young lady with a 4-year-old daughter, willing to be a medical doctor, sergeant at ER. It should be not easy for her to let strangers observe her interview because it is very personal thing she talk to Ms. Crawford. Ms. Crawford did not allow her to talk about her daughter during interview. She seemed a little nervous, but relaxed over time, came up with big dream, and talked well with a lot of smile on her face. She was already working on schooling, being in paid internship through women@work, etc. to move forward with Lillian, and very much ready to get granted.

Ms. Crawford was wondering why it took two months for her to be interviewed after applied. Lillian told us that the grantee was much in anger and could not make decisions or move right at the time she applied. I was fascinated by Ms. Crawford, the way she carried on the interview and how she changed the grantee's facial expression and tone of voice, and also by Lillian, the advocate, the way she's been handling and taking care of the grantee's situation and anger very well. I thought it would be great if I get trained by Lillian myself. It is very hard to manage other's anger. She must be really good. Ms. Crawford told the grantee that she has a lap top computer ready for her as first step to her dream, and may pay application fee for school, then the grantee signed the agreement, which promises to be responsible, and to help three other women.

I was happy for her and very touched by everything though that interview and could not help crying. What a wonderful work Ms. Crawford is doing, and what a wonderful support and hope she is giving to women who went through domestic violence!

I learned from this process that the grants will be made efficiently by three people work together: advocate, grantor, and grantee herself, who should be ready to move forward to her practical goal of her life with response to get a grant. Ms. Crawford taught us that the organization can be started up on my own and carried out under collaboration with others if I am very much focused on my mission.

JWLI Fellowship Program 2012

- Weekly Journal (Sep 24- Sep 28) -

Day1: Sep 24, 2012 (Mon)

09:00-18:00 Ellis Memorial <Leo Delaney, CEO>

They moved to new building last week. The building was very nice. I could not believe that it used to be in a terrible condition with water dripping, broken pipes and walls etc. The Grand Opening Ceremony was scheduled today, and also Leo was attending to 2012 Avalon Exeter Community Benefit Fund Award Presentation. He was very busy, but took time for us to get to know about Ellis Memorial.

He briefly went over the schedule with Ellis Memorial and explained about the programs it provides, using organization chart. He also made sure what we would like to learn from them. He said he always think about how to benefit the community. When he came to Ellis Memorial, it was not doing good and had a lot of debt. It used to be a poor community, but as the economy is getting better and more jobs were created in this area, poor people were pushed away to isolated area. He was assigned to evaluate and close the organization or turn around the organization. He first fired people, made poor people leave, but he felt a strong need for helping poor people. He tried to pay off debts by replacing people to different buildings, and obtain grants. Today must be a very special and honorable day for him to celebrate his achievement.

Ellis Memorial used to provide daycare and now provides early education program. In addition, it provides afterschool youth program for children aged 5-12 and adultery, disabled health program for elderly and disabled. Clients are people in poverty, vulnerable kids, kids of working mothers, and kids of rich parents. Fee is differentiated by income. That is not the only benefit it provides to the community. He also raised fund to make a park for kids. However, He does not only care about clients and community, but also his staff. Its benefit and salary are unusually good for non-profit. He does not want to have many people in need left out. For that, he spares no effort to get enough grants and donations. He is highly caring person. He told us his personal history, which was astounding. I was so moved by his story. He went through unimaginably difficult time, but fortunate to meet with a woman counselor who mentored and guided him to believe in him. Since then, he has been working for helping others. He understands their pain.

As a part of our learning about fundraising, he took us to the community benefit fund award. It is a unique funding system that a developer is obligated to fund to local non-profit organizations to benefit the community in return for receiving profit in the community. Ellis Memorial and 10 other non-profit organizations have received community benefit funds from AvalonBay Community for its Exeter apartment tower project. I could see the

city of Boston is well-concerned about benefiting people in the community and willing to help non-profit organizations. Women's Lunch Place was one of them, and we met Sharon and congratulated her. In the opening speech, it was great surprise that JWLI was introduced. Leo did that for us. How grateful we felt about what he did for us.

Day 2: Sep 25, 2012 (Tue)

09:30 - 16:00 Ellis Memorial < Leo Delaney>

We visited Adultery Disabled Health Program (ADH). The person in charge of the program, Stacy took some time to explain us about the program.

The ADH is medical based program, which means clients require Medicare and approved by doctor. Clients staying in apartment with services can only come for two days a week. Staffs are two nurses on part-time base, director who is nurse on full-time base, an assistant for nurses, social workers and an administrative staff. They open Mon to Sat, have meal, transportation services and programs such as jingo, stretch exercise, field trip, and even health education, to keep clients healthy and away from nursing home. They always care about elders to enjoy time there and be happy. Sometimes Director of Youth Program, Rachel brings kids over to do some activities together with elders for 1 hour. Stacy said that elders and kids work very well together and give good influence to each other as they teach and help each other.

The similar activities and programs have been practiced, and many good outcomes have been reported in Japan, too. As economy was going bad, Senate decided to cut the budget off for elderly support, and ADH was about to close down about 3 years ago. But women in southern Boston saved it by making calls to appeal how this place means to them, and Senate decided to put the budget back.

There was a time the board members of Ellis Memorial told Leo to close it down, but Leo worked hard to find a way to get funding as he believes ADH is needed and necessary program to care elders in the community. The budget for elders tends to be cut first in America, but Leo did not let it be so in his organization, and he got money granted to maintain ADH program. I was so impressed by his strong will and ability to get things done. Since it is still under tight budget, She said that marketing should be done more to increase clients. However, it takes time to bring elders staying home for long out of house and to join Ellis ADH program. It takes time to complete a lot of paper works required to get doctor's approval. I thought Leo knows and does his role, and thus he provides a model. Then his staffs encouraged by him move forward in the way they can.

Ellis memorial has a lot of volunteers helping their program. Lindsey, the volunteer coordinator, explained about overview of volunteer activities, process of hiring volunteers,

programs for volunteers etc. In America, high school students have to participate in social service as a part of their school work. It is very good system for kids to be more aware of social service as well as social needs through hands-on activities, and also good system for social organization to get extra help.

They also conduct development activities such as Antique Show to meet people and get people involved in the activities to benefit the community. The process to hire volunteers is more organized and carefully conducted. They interview them, and for over 18 years old, they do a background check, which is not common process for volunteers in Japan.

They provide orientation for them and also assign them based on their skills. When I volunteered in Japan, I felt being lost and confused about what I was expected to do, and what the outcome is. Those systems for volunteers would work better for volunteers to be sure what they are doing and for efficient work to be done.

17:30 – 21:00 Red Sox Game at Fenway Park

Leo is a big fan of Red Sox, and maybe most of Bostonians are. The Fenway Park is historical stadium for red sox. They had a special parade in the opening with players of 2004 world series championship on duck trucks. Everybody got excited and crazy. We really enjoyed this special event. It is too bad Red Sox did not do well with the game, but I really enjoyed the atmosphere, wave and food. Leo is very considerate person to let us have time off and enjoy something very American. We had a chance to meet Leo's daughter and ex-wife and enjoyed conversation with them, too.

Day 3: Sep 26, 2012 (Wed)

10:00 – 12:00 Ellis Memorial <Leo Delaney; Maria Teixeira, Director of Early Education & Care; Rachel Davidson, Director of Youth Program>

Leo briefly explained to us about early education & care program, and youth program. Ellis sets different rate by income for early education & care program. They have priority slots for lower income family, and State buys some slots for low income people, and the payment is made by voucher, but not in full. I was surprised to know that Ellis, to fill that gap, has to get donation and grants. Because they provide good early education system, some rich people send their children. That is another way to earn some money. At the same time, it benefits the community by having good education program available to more children. It was surprising to hear that they have 9 to 10 months waiting list. The program is located in new building with neat, nice, and cozy atmosphere. I see the parents also appreciate the place, too. Old building is now for only youth program. Youth program is after school program for children aged from 5 to 12. Over 100 children attend the program, and Ellis work with public school.

Maria explained us about the program to prepare for future learning of children aged from 1 month to 5 years old. Currently they have 117 children and 30 staffs. They do developmental screening for first month, and then on a regular basis, check the development of each child. If they find any delay in development steps, they work on the child, and even have specialized person, therapist etc. come to work on the child if required. They don't work with children only, but also with their parents. They actively communicate with parents of especially infants, more with young parents. They communicate via daily report from/to parents, morning and afternoon conversation with parents, notebook with special note, email, phone, etc. They also provide them helpful information to raise children, have open door policy that parents come in anytime to see how program is conducted and how staffs take care of their children. Preschool children experience field trips, where parents are sometimes invited. Parents and children share their work and culture with others, thus they teach parents how to tap into community.

Youth program is different from them. Parents living or working close to Ellis Memorial have their kids attend the afterschool program. Rachel said There are different types of after school programs. Extended school day is provided by school and teachers and separate staff will work. Other is community-based program for only children in neighbors. Ellis is also community-based organization but not limited to neighbors. Therefore, Rachel has to have partnership with many public and private schools. Communication with school teachers is very important to have them understand the good use of afterschool program at Ellis Memorial, and advantageous for children not to be confused by using same language as their teachers, which I strongly agree.

In Japan, it is hard to find afterschool program not operated by school or by community because I think it is difficult to manage the program with a lot of work and budget required while a great efforts have been put on increase of daycare centers for preschool aged children. At Ellis Memorial, 1 staff is assigned for 13 children, and special workers help children with special needs. They get a lot of help from part-time staff. No degree is required to work there as long as they have high school diploma, but preferable some experience working with youth. Ellis offers 15 hours of development training. It was unfortunate we could not see activities with youth.

14:00 - 16:00 MADCA 2012 Outstanding Legislative Achievement Award to State Representative Dorcena Forry <Leo Delaney>

Leo is board chair of Massachusetts Association of Day Care Advocates, and he took us to the award to state representative at Dorchester College Bound. I was very surprised by the idea that they show their appreciation by awarding the state representative for her support on early education in the community. I see a lot of award given by state to organizations or individuals in the community, but it was done other way around. I thought it is very good idea to have good relationship with state through representatives who understand the needs of people in the community and are willing to put efforts for better. At the same time, it gives some pressure to state by having others recognized the work, I believe. This whole idea expresses the community is for people live there.

Day 4: Sep 27, 2012 (Thu)

09:30 - 11:00 Ellis Memorial < Brian Woods, Chief Operating Officer>

Brian explained to us about funding of corporations and foundations. Corporations get 50% of gross income tax incentives in Boston, and funding to non-profit organizations works as publicity of good will. But recently, they see non-profit as business model and make investment to objectives and outcomes. It makes it difficult to write grants, but once the relationship starts, it brings life-long partnership. Foundations are in many cases created for social contingency and usually have own guidelines and help specific programs, recently more for children and youth. He also explained to us the role of board members who are from high position in various areas. They know many people and bring connections to corporations and founders.

Brian uses data base (associated grant makers: AGM) to research available grants, where the program at Ellis Memorial meet their goal. He showed us the data base and how to research. There are foundations willing to grant only capital such as building. He explained what kind of documents need to be prepared, what should be contained in the proposal. Research-based evaluation is useful tool to explain and prove how beneficial and efficient the program is. This gives idea of how to get grants: non-profit organizations need to evaluate their program to give some idea of outcomes to funders. We greatly appreciate him for providing USB with data of grants documentations to each of us.

11:30 – 14:00 Family Justice Center < Leo Delaney; Anne Marie Delaney, Director >

Anne Marie is Leo's wife, and kindly took some time to talk about the history and operations of Family Justice Center (FJC). I was very much impressed by the concept of FJC. Its original is FJC in San Diego, and in 2005, President Bush decided to fund to implement Pro-arrest/Mandatory Arrest policy.

Boston Mayer decided to approach Federal to start FJC in Boston. Now the Boston Public Health Commission takes a role as umbrella administration, not centralized, and helps non-profit organizations located at FJC. By co-locating and coordinating with each other, clients of non-profit organizations (not FJC) don't have to talk the same painful story repeatedly and also keep them safe. They also have police involved, and the office is located upper level to make atmosphere easier for clients to come anytime. FJC provides place for free, gives trainings, helps with writing grants etc.

We had a chance to know some of the organizations located in FJC. We visit a nurse practitioner, who mainly does complete physical exam to children for medical collection. She uses med camera instead of children going through pains or harm. She told us high security is required to protect those children.

I see a great need of establishing the network between non-profit organizations and community through city and professionals to collaborate each other. I thought the system of FJC would be adopted easily and work better in Japan.

15:00 – 16:00 Afterschool Program at Ellis Memorial

We wanted to see how the afterschool program is carried out, so Leo scheduled that opportunity for us. I watched how staffs work with children with homework. I asked a staff what they prepare for kids with no homework, and she showed me study work prepared for each child. I helped 5-year-old girl with her writing her name and numbers from 1 to 10. The staff is focused on tomake sure children finish their homework. It is very different from what we do in Japan. I believe staffs are expected more to help children learn the process to do things right, or the way to practice themselves. I wondered where this difference comes from.

Day 5: Sep 28, 2012 (Fri)

10:00 – 12:00 Ellis Memorial <Leo Delaney>

He took some time with us to go over the programs we participated and questions if we have any. I asked about afterschool policy to help children with homework. Leo explained to me that priority is to make sure children finish homework, and not making a conscious attempt toteach on their way because teachers at school have their way of teaching and Ellis Memorial does not want to confuse children by teaching differently. I understand his concern, but I still have a question about it. As children can get more individual attention for help, it might be good to find what kind of difficulties children are facing and possible solutions, which can be shared with their teachers for the sake of children. I don't know if it is adaptable in America.

Leo kindly provided development screening and evaluation sheet they use for early age children. They do performance evaluation on line. Individual child profile is licensed by Massachusetts Department of Early Education and Care (EEC), which need to be renewed every 2 years. Staffs have to evaluate every 6 months. Leo said they started periodical evaluation before this licensing system started. He really is a visionary leader.

12:30 – 13:30 Meeting with Prof. Patricia Deyton at Simmons

Each of us informed her about our experience with Ellis Memorial. I told her that I see Ellis Memorial different from other non-profit organizations. Leo not only provides supporting

and education programs to people, but also build a safe park for children in the community to play, move in to old buildings in the community after working on the renovation, which will be profitable resource even after the organization moves out. I could learn from him many ways to benefit people and community.

2012 JWLI

6期フェロー研修報告会



2012年11月10日**(**土曜日**)** 東京ウィメンズプラザ

2012 JWLI 6期フェロー研修報告会

2009 年から、帰国報告会は、その年の研修生と BPW の担当者数名との、ディブリーフィングと言う形で、BPW 内部だけで行われていました。しかし、2010 年のディブリーフィング時に、今後は素晴らしい研修結果を公開でより多くの方達に広める機会を作る事が決定されました。

2011 年、昨年の報告会は、BPW の関東ブロック研究会のプログラムの一部として、組み込み、BPW メンバーや、知人、関係者そして、JWLI 同窓生の皆様、総参加数 50 名に対して、始めて、「公開」と言う形式で行われました。

2012 年は、JWLI 同窓生の会がイニシアティブをとり開催されました。 JWLI 同窓生は、一昨年から着実に勉強会などを通した活動を活発化させており、独立した団体としての公開の活動を目指していました。 2012 報告会の開催にあたり、東京ウィーメンズプラザフォーラムの企画に応募し、フォーラムに参加する形式で、単独の報告会が可能となり、以下の通り開催されました。 当日は、定員 40 名を超え、50 名の方達が参加し、熱気あふれる報告会となりました。

内容は以下の通りです。

日時: 11月10日 土曜日、14時~16時半 (受付 13時半)

場所: 東京ウィメンズプラザ 2階 第1会議室B

当日プログラム詳細

13:30 開場 受付開始

14:00 報告会の開始

総合進行司会 JWLI 6 期生 谷岡理香

14:00~14:15

JWLI プロジェクトについて

2012ボストン研修プログラムカレンダー内容について

紹介説明 JWLI 4期生 櫻井啓子

14:15~15:30

JWLI2012(6期)ボストン研修生報告プレゼンテーション

<u>谷岡理香 (資料 1 参照)</u>

「女性のリーダーシップと Make a Difference ~ 私のビフォー・アフター ~」

4 週間の研修全般を概観しつつ、女性、リーダーシップ、3. 1 1、日本社会、make a difference をキーワードに報告者の学びを報告する。

榊原清乃 (資料2参照)

「ボストンの NPO 先進事例を肌で感じて、当団体の課題と今後について ~母親自立&育児支援の NPO 運営者の立場から~」

テーマに沿った報告と同時に、ボストンで学んだ 巻き込み力、NPO リーダーの人格の高さ (社会課題に対する・どの層にも対する Fair な視点と尊厳の視点)、ファンドレイジング、 日米の税制の差の乗り越え方なども報告する。

文本志麻 (資料3参照)

「非営利組織(NPO)の運営における協働と連携」

訪問した NPO 法人が、誰またはどこと、どのような形で連携をとって、ミッションを遂行しているのか、そして組織を運営しているかを報告。

15:30~15:45 休憩 インターミッション

15:45~16:15 グループ・ディスカッション*

16:15~16:25 グループ発表

16:25~16:30 ゲスト参加者 ご挨拶

(松原様 NPO 法人日本 BPW 連合会/ 柳田様 CWAJ)

16:30 報告会終了

*グループ・ディスカッションは、以下の4つのテーマに分かれて行われました。

<u>1. (谷岡グループ) ファシリテーター栗田 (JWLI 3 期)</u>

被災地東北の女性支援の為に私たちができること、女性管理職を増やすことなど女性のリーダーシップについて参加者との話し合い。

3.11後、東北にどのような支援をするかという議論になった。1人、2人の発言は大きな力にはならないが、「防災委員に女性を入れて」という要望書を関係省庁に提出すると大きな力になる、という意見が出た。

2. (榊原グループ) ファシリテーター 宮澤 (JWLI5期)

"Why Women Still Can't Have It All"(女性はなぜ、すべてを手に入れることできないのか?)の 記事を参考に、日本の女性の立場の変化(出産、育児)に対応、乗り越えて、日本で女性のリーダー が増えるための必要な社会的環境とは? 女性リーダーが増えるための、NPO の果たす役割とは何が 考えられるか?

日本の女性が特に出産・育児などで立場が変わっていく際に、最後まで全部のうち一つを失わないためには どうしたらよいか、について話し合った。そのためには「良い女性、良い母」にならねばならないという個人の思いこみを捨てることがまず大切だという結論になった。社会的制度の問題が大きく関わっている。企業は利益にとらわれやすいので、「女性を雇うとこんなに利益が出る」と説得し、妊娠・出産で女性が仕事を辞めない環境を作るように働きかけることが大切。法律を改正していくことも大切だが、その際は外圧を利用すると良いかもしれない。

3. (文本グループ) ファシリテーター 瀬川 (JWLI3期)

現代社会において、営利、非営利組織に関わらず、大きな価値観の変化が生まれている。 「競合から協働へ」。互いに連携し合う事で生まれる大きな力が、現在そして将来ますます重要な要素となるとされている。他者や他組織とのネットワーキングや連携についてどう理解し、どう考えるか、何ができるか。

連携において重要なのは、その団体の成果を具体的に、個人に対して、そして全体に対して見せることが大切。寄付がしやすくするような取り組みや、お金ではない寄付(書き損じはがきなど)で、個人や団体に協力を仰ぐことも重要。個人のコネクションやネットワークが資金調達の上で大切である。また、個人の寄付者や連携先へのきめ細かな対応が大切。

4.(櫻井グループ)ファシリテーター阿部(JWLI5 期)

指導的地位の女性のリーダーシップについて、重要となる要素についての意見交換。

組織の分野やサイズに関わらず、指導的な立場を目指す女性にとって、重要な要素は何か? 今後の日本社会の大きな課題である女性の社会的地位改善とその為の指導力等について。

リーダーについて話し合った。リーダーとは、自分が何をしたいかを自分で語ることができ、行動を起こして切り開いていく人であり、それに沿った行動がリーダーシップである、という結論に至った。

【発表資料1】6期生研修報告:谷岡理香

大学の教員であり、アナウンサー。ニュース部門で四半世紀近く仕事をしてきた。日本社会における女性のリーダー不足、あるいは不在、という状況をどうすれば解決できるのか、日本ではそもそも女性のリーダーシップについて勉強する機会がない、では、アメリカの女性たちはどうやってリーダーシップを学んでいるのか知りたいと思ったのが参加動機の 1。3.11 の震災で原発事故のテレビジャーナリズムにひどく絶望したことや、以前から女性の労働問題―どうして女性は仕事と子育てを両立できないのか、それはあまりメディアがニュースとして取り上げないからではないか等と考えていたことから、マスメディアが報じないなら NPO や市民のジャーナリズムを支援すればよいのではないか、アメリカはそういう部分が進んでおりヒントが得られるのではないかという思いから参加したのが動機の 2。参加するなら今年しかないと思った。ここまでがビフォー。

1週、3週、4週はほとんど NPO の研修で、ファンドレイジングのプラクティカルな訓練や具体的なプロポーザルの書き方などを教わり大変勉強になった。もうひとつがシモンズカレッジの「女性のための戦略的リーダーシップ研修」で、NPO を訪れ学ぶことと相当趣が異なる。自分自身はキャリアアップすることにはあまり関心が無く、どうやってアメリカの女性たちがリーダーシップを学んでいくのかを知りたい、見てみたいという立場にいた。実際に受けてみて、戸惑いとショックと学びがあった。大きかったことの 1 つが「360 度評価」、同じ質問に対して自分の答えと他者からの答えを比較するもので、「女性のための」ということで指導教官との面接する中でジェンダー・バイアスがどうかかるのか見ることになり、アドバイスも頂き勉強になった。男性管理職と女性のコメントに違いがあり、男性管理職からの「組織の一員として働くことの自覚をもつ」ことへの自分に対する評価が低く落ち込んだ。しかし、このように率直な評価をもらう事はなかなか無いチャンスでもあり、「これは私のためにもなる」ということに気づいた。自分自身のキャリアアップについて考える良い機会となった。次に貴重な学びになったことは、自分のタイプを知ることだった。私のタイプや取引先のタイプ、それを知った上での交渉の方法など考えたことがなかった。それは戦略の欠如ともいえることをシモンズの1週間で学んだ。

訪れた NPO の代表者に共通する、パッション、エモーション、失敗を恐れない行動力、一生分インスパイアされた。日本で失敗すると「それみたことか、言わんこっちゃない」という空気が社会や世間にはあるが、皆が失敗を恐れずに行動すれば何とかなるかもしれないという雰囲気をリーダーの方々から学んだ気がする。また、コミュニティに対する熱い思いを持ち、どんな人たちをコミュニティのメンバーとして受け入れ、あるいは、落ちそうになっている人をどのようにして掬いあげるか、ということを学んだ気がする。日常に「make a difference」があることも4週間で学んだ。Web of Benefit 代表の Jo Crawford 氏は今年の CNN の Heroes の一人に選ばれた。基本的に一人で DV サバイバーのサポートをしている。彼女からは「あれもしなくちゃ」「これもしなくちゃ」と To Do ばかりを考えず、もっと自分を大切にすることを教わった。さらに、「一人では出来ないかも」感から「一人でも出来ることがある」ということも学んだ。

良いことばかりではなく「女女格差」も感じた。 訪れた NPO の多くが DV 被害者のサポートをし

ているが、被害者の多くは女性であり、サポートをするのも女性である。NPOのリーダーたちは、リーダーというよりは、転がり落ちていく人たちを、何とかもう一度社会に戻そうとする「社会のセーフティーネット」のような存在であった。社会から落ちこぼれ、復帰できない女性たちを間近で見る一方で、シモンズでの1週間は、キャリアを形成して男性社会の中で男性と伍して生きていく、または男女に関係なく能力を伸ばしていく女性たちについて学び、「女女格差」を感じざるをえなかった。これは日本でも同じではないか。自分はどこに立ち、どこから発言したらよいのか、今でも整理できていないが、それを抱えたまま持ち続けていくのも大事だと思っている。

訪れた DV 関連の NPO の中で一番大きな組織のリーダーCEO は男性で「個人の理念は別として、自分の NPO のためになれば、企業でも政府でも連携すべきだ」と述べていた。柔軟性があり、また、男性の方がネットワークのつなげ方が上手だと思った。それを目の当たりにし、男性文化が持つ余裕から来るものではないかと個人的に思った。一方で女性のリーダーはひたむきで、まっすぐ。この差は何だろうと整理できないまま帰国した。

くまとめ>

社会を変える一歩は大きくなくてよい―Baby Step. 小さな勝利でいいのだ、そこから始まる Small win を大事にしよう。Say Good Job"ー相手から言ってもらうのを待っていないで、能動的に 自分から働き掛ける。To Do ばかりではなく、好きでやっているのだから―Have Fun。気持ちがあれば、同じ仕事でも「私はやりたいからやるのだ」と思えば、気持ち一つで変えることはありそうだという数々の気づきが学びだった。

Emotional Intelligence で Relationship をつないでいくという考え方は、女性のネットワークをつなげていく上で、いいな、と思った。

<今後に続く方へ>

英語が苦手な方へ。聞きとる力は必要だが、参加する目的と学びたいものが明確であれば、大丈夫ではないかと思う。年齢が気になる場合、諦めなければ何とかなる。年齢を言い訳にしないことが大切。

<自分の短期と長期プラン>

短期: 大船渡市で職を失った (水産加工関係) 女性たちの手仕事支援。復興人形 250 円 (200 円収入、50 円、材料費・輸送費) やマフラー1800 円。

<中・長期のプラン>

日本でも NPO の仕組みや女性のリーダーシップに関する教育が行われている(城西国際大学、お茶の水女子大等)。隣の国で勉強できることは勉強し、一方で自分の国ではどうなっているのかをリサーチした上で、ネットワークをつなぎながら、何ができるかを考えていきたい。自分は教育の分野にもいるので、女性のキャリアップのための支援事業も積極的にネットワークを結びつつ行っていきたい。一人でできることもあるが、自分が所属している JCJ(日本ジャーナリスト会議)などとも協力して女性ジャーナリストへの支援策について考えていきたい。

【発表資料 2】6 期生研修報告:榊原清乃

名古屋にて、お母さんの自立や、親子・育児支援を行っている団体であるままスタート・クラブという、来年 NPO 認可を目指している任意団体の代表を務めている。運営をしている立場から本日の発表を行いたい。

JWLI では毎日のように刺激を受ける日々を過ごした。本日の報告では、自分の団体に立ち返って

みたときの課題や今後—JWLI の研修を受けたあと、どのように運営していったらよいのか—に関して、現在アクション・プランで立てているので、それも紹介したい。

2008 年高齢出産で男の子を生んだ。早産で、何の準備もないまま出産したことから、産後鬱のような状態だった。いきなり生まれたこの赤ちゃんをどうしていったらよいのだろうか、母乳育児などの知識もなく、躓いてしまった。息子の出産後すぐにリーマンショックで自営業の実家も打撃を受けるなど、様々な不可抗力があり、自分の今後の人生や、子どもをもっての生き方などについて考えざるをえない状況に直面した。当時かなり追い込まれていたと思うが、今思うとすごくチャンスだったと思う。

一年後会社に復帰した後、夫が東京転勤となり、迷ったが、最終的には名古屋に残り、保育園も見つかり、職場復帰の道を選んだ。母子だけの育児生活・仕事生活を行うことになり、日々それのみでいっぱいになった。先輩ママから言われていた通り、子どもがすぐに熱を出すなどのフルコースを経験し、これ以上仕事を続けられないと思い、一度退職届を出したこともあったが、育休を取り直すことができ、再度職場復帰した。しかし、夫の転勤が延長になったり、親の体調が崩れたり、自分の価値観も変わらざるをえなかった。子どもの育児を大切にしながら働くという道はないのだろうか、100か0ではなく、50・50や80・20などそういう生き方もあるのではないか、と思い始め、ほかに道がないのであれば、自分自身ができることから始めていきたいと思い、ママスタート・クラブという、地域でお母さんの居場所づくりをする団体を立ち上げた。

2009 年 7 月、息子が 1 歳の時に「素敵なママの人生のスタートを応援します」というミッションを掲げて立ち上げた。同時に名古屋市の社協から助成金をいただけることになり、自分たちも小さい子供を持つママたちだが、この地域の皆さんとともに、どんな立場の方でも一緒に子育てをし、楽しいと思えるような育児の環境とコミュニティを創造していこうと、団体を立ち上げることができた。名古屋には 16 区あり、年間の出生率が多く、転勤族も多い。子どもと赤ちゃんを抱っこしながらだと「ママスタート・クラブ」が遠ければ、行くのが結構大変になってしまう。そうした方や SNS で知り合った方から、自分の近くでやりたいと声をかけられ、私も遠くまで行けなかったこともあり、やる気のある人にこの仕組みを横展開して協力し合いましょうとやってきたところ、10 区+2 市まで増えた。現在、ボランティアは 80 名程度まで増えた。

しかし、夫の転勤、復職、第 2 子、第 3 子の出産など、女性のライフスタイルは大いに変化する。 そういったことを覚悟の上で、団体を運営しなくてはならないことをこの 3 年間で学んだ。自分たち のやりたいことを中心に進めてきたが、ニーズはかなりあり、年間約 5000 組の親子が参加している。 日本では、妊娠・出産によって約 6 割の女性が仕事を辞めざるをえなくなっている。出産後、子ども と二人だけの生活などで悩んでいたが、こういうコミュニティによって救われたという声も多い。

助成金を得て、今年から「ライフ・デザイン・ラボ」という、妊娠から出産期の女性のライフスタイル支援事業というものを始めた。妊娠・出産を機に、女性の役割、心と体の変化、また、パートナーとのライフスタイルの変化、自分自身の生活の変化など、女性はかなりの影響を受けるため、妊娠期に全く心構えや準備がないまま出産に至ると大変。私自身が躓いたように多くの方が鬱の状態になっており、そういった方が少しでも育児を前向きにできるようにと、妊娠期、出産・育児期、社会復帰準備時期という時期に分かれて、それぞれいろいろな施策をしながらお母さん自信が人生の主役であると自信をつけて、多様な働き方の提案を行うことで、愛知・名古屋での子育て満足度を向上し、促進させるというプロジェクトとなっている。

ボストンのシモンズでの JWLI: 360 度評価で自分自身の評価と周りからの評価の違いも学びとなった。1ヵ月の間にいろいろなことを学んだ。JWLI への参加動機は、ファンドレイジングの方法を学びたい、政府、民間団体や企業との連携について知りたい、NPO の団体運営の先進事例について学びたい、の3つ。学びとしては、寄付金制度、税控除制度など、アメリカと日本はずいぶん異なるので、日本において法人からの寄付が進まないのも、税制度の壁があるので、アメリカと別の主張でファンドレイジングの方法を考えて実行する必要があると感じた。

税制がかわるのを待っていても時間が経ってしまうので、周りの人々と方法を模索しながら考えて行きたい。いろんな団体でファンドレイジングミーティングをやったり、助成金を探す専門家がいるなど、自分の団体とはかなりやり方が異なったりしているので、そういったことにも今後取り組んで行きたい。連携なども、今回訪れた NPO のリーダーの皆さんは地道に関係を継続的に保っていて、新規のネットワークに対しても、アタックして、小さな団体でも大きな企業に電話をかけたりしていたので、そういう部分を自分も恐れずに取り組んで行きたい。

Baby step と長い面で見た long-term strategy もやっていきたい。NPO で働きたい人材は、震災後特に増えていて、そういう方々にとって、自分たちの団体が働く上で魅力的な団体になるようにしていきたい。

アメリカは、日本にはない原因での社会の階段があって、貧富の差が存在するが、(今回出会った NPO のリーダーたちは) どんな層に対してもフェアな視点で、例えばお金がある人のために行えば、寄付金がもらえるとか、そういう視点ではなくて、相手に対する尊厳をもって相手のために支援を行っているという人格者。すぐには学べることではないが、学んでいきたい。

自分の Dream Proposal は、long-term 系なのだが、6割、7割のお母さんが前のキャリアを辞めざるを得ない状況を改善したい。例えば、お母さん向けのインターンシップ事業やワークシフト:多様な働き方(子どもを連れながらの働き場を作るなど)の提供をしていきたい。フルタイムの会社員という働き方以外の多様な働き方—子どもをもったからこその働き方がある—といったことをどんどん作っていくと同時にチャイルドケアシステム:ベビーシッター、子どもの教育、というものを同時に考えることのできるシステムを行っていきたい。

こういったアクション・プランを立てる際に、厚子さんがよくおっしゃったのは、ポジティブで、クリエイティブで、プラクティカルで、フレキシブルで、Have a fun – かたく考えず、楽しんで、フレキシブルに、いつ変わってもよいのだ、という風に思い、アクション・プランを作って、頑張って実行していきたいと思う。

【発表資料 3】 6 期生研修報告:文本志麻

アメリカ留学中および職場でのボランティア活動、日本での地元自治体のボランティア活動を通して、様々な問題から精神的な障害をかかえる子どもやそうした子どもを持つ親たちの心理的側面を支えていきたいと思い、臨床心理士を目指して大学院に進み、今年3月に卒業。現在、精神・神経医療研究センターで臨床研究の支援を行っている。発達障害・情緒障害・精神障害を抱える子ども、成人、親の支援を行いたいと思っており、既存のサービスでは十分ではなく、親自らが立ち上げ支援を行っている NPO をサポートしていきたいと考えている。しかし、十分なスキルも知識もないので、JWLI研修を通して学びたいと思い、参加し、たくさんのヒントを得ることができた。その中でも NPO の運営における協働と連携について報告したい。

マサチューセッツ州とボストン市との連携について 2 つの NPO を紹介したい。エリス・メモリアルでは、早期教育・デイケアプログラムのために幼児向けの公園を設置し、地域の人々も利用できる施設となっている。また、地域の古い建物を改装して、そこにオフィスや施設を移すということを繰り返すことで、前の建物の再利用が可能となり、そこに人々が集まり、地域活性化につなげるなど、ボストン市の地域開発の一端を担い、地域に貢献している。これによりエリス・メモリアルへの認識が高まり、その結果、ボストン再開発公社(BRA)より、コミュニティ・ベネフィット・ファンド(ビルの建築の再開発を行う際、企業にもたらされる利益に還元するシステムの一つ)という補助金を受けることができる地域の NPO のひとつに選抜され、最も多い寄付金を得ている。また、CEO の Leoが委員長を務めるマサチューセッツ・アソシエーション・アンド・デイケア・アドボケイト(MADCA)では、Dorchester(ドチェスター)における質の高い早期教育に尽力・貢献したとしてマサチューセッツ州の州議会議員を表彰した。州議会議員の社会貢献における知名度は高まり、同時に良い関係が築かれ、継続的な支援が見込まれると思われる。マサチューセッツ州やボストン市といった大きな組織とエリス・メモリアルの両者にとって win-win の良い協力関係が生まれ、それにより可能となる地域への社会貢献活動や資金調達を様々な形で行っている。

もう1つは私の関心が最も高かった施設、イタリアン・ホーム・フォー・チルドレンである。虐待やネグレクトにより、家庭や情緒・精神面で問題を抱える子どもたちを法的監護のため一時的に施設で預かり、政府から補助金を得て、ケアを行っている。もとの学校に通える状態であれば、それぞれの学校からスクールバスが迎えに来て、以前とは変わらない環境で子どもたちが勉強できるように配慮されている。外部からも、行動などに問題があり、学校に通えなくなった子どもに対し、地域の自治体の判断で通学のための費用を負担してもらい、本施設の学校へ通うことができる。政府や自治体と、最終的に子どもたちが元のコミュニティや家族のもとに戻っていけるように支援するという目標を同じくし、子ども達の支援を信頼されて任されていて、その活動に対する協力や支援金が受けられ、より様々な形での支援活動が可能となっている。

次に、他の NPO や専門家との連携のケースを紹介したい。DV 被害者の女性の自立を支援するウェブ・オブ・ベネフィットは、代表者の Jo 一人で運営し、自立への準備ができている DV 被害者の支援を行っているため、シェルターで彼女たちを生活・仕事・精神面でサポートしているアドボケイトとの連携が欠かせない。DV から逃れた被害者は大きな絶望感や無力さ、怒りを抱えて生きているため、そこをアドボケイトが十分に理解してケアができないと、次に進むのが難しい。被害者が寄付を受けた後もきちんと自立するまでサポートを続けるアドボケイトの役割はとても大きい。Jo は、被害者本人と資金提供者とアドボケイトの 3 人がそろって初めて機能する仕組みだと言っている。一方、ボストン市内のホームレスや貧困で苦しんでいる女性のために朝食・昼食の提供などの支援を行っているウィメンズ・ランチ・プレイスでは、診療所に医者が常駐するなど多くのボランティアが支援活動を支えている。創設者のアイリーン自身も精神科医として今も支援を行っている。

これらの連携を統合したシステムを実践しているのが、ボストン公衆衛生委員会の管轄であるファミリー・ジャスティス・センター(FJC)である。DV、性的暴力、児童虐待、人身売買などの被害にあったボストン在住(それには限定されないが)の個人や家族に対し、一か所で直接サービスを提供することを目的とし、FJC の傘下にいる複数の NPO と連携をとっている。FJC が所有する建物の場所を NPO に貸し、FJC は包括的な立場で、NPO の活動に対する制限などは設けず、必要に応じて人材の研修、法的処理の準備などの支援を行っており、警察も常駐している。被害者は精神的につらい状態で、通常だと病院や警察などいろいろな所に出向き、同じ説明を何度もしなくてはならず、精神的

負担が大きく、対応にも時間がかかるが、ここなら一か所でアフターケアも含めて手続きをすべて進められ、支援が受けられるようになっている。FJC も NPO も同じ目的に向かい、お互いに足りない部分を補い合って、それぞれ強みを活かして活動ができている。私はこれが日本でも活用しやすい仕組みなのではないかと感じている。

企業との連携では、アジア系の DV 被害者の女性たちのエンパワーメントと仕事と生活のバランスを促進し、自立を支援するため、ATASK がより多くの DV 被害者が英語を習得できるよう、オンラインで 24 時間、いつでもレッスンが受けられる languagelab.com という会社と提携してサービスを提供している。バーチャルな世界で、顔を見られることもなく、匿名で、他から見つかる心配がなく使用できる。さらにアクセスポイントの増設やネット接続の特別料金を設定した方が良いとのことで、大手のケーブル会社 ComCast との交渉も考えている。企業と連携することで、自分たちが一から作らずに、すでに企業が持っている技術やサービスを活用し、迅速かつより良いプログラム、そして環境を提供できる。

ATASK はボストンの医療研究機関タフツ・クリニカル・アンド・トランジショナル・サイエンス・インスティテュートとも連携して活動を行っている。コミュニティ・ベースの共同研究を通して、研究機関からの資金援助と研究指導を受けながら、他と共有・応用できるようなより効果的な支援のアイデアを提案することが可能になる。また、有効性を示すことで、資金提供を得やすくなる。一方、研究機関は、コミュニティから信頼の厚い NPO の協力を得ることで、研究への参加に対するコミュニティの理解を得やすくなり、研究が実行しやすくなる。NPO と研究機関が協力して研究を行うことで、最終的にはコミュニティの方々、被害者の方々の利益になる。

アメリカの NPO は、既存のシステムでは国の支援などが行き届かない必要なサービスを提供し、より支援対象者に近い存在としての支援ができており、また NPO の存在、必要性、役割がきちんと人々に認識されている。NPO は社会的支援サービスのギャップを埋めることのできる団体であり、ネットワークの要ともいえる。他とネットワークをつなげることで、NPO も様々な恩恵が受けられる。

JWLI 研修を通して、ボストンの NPO は様々な所と提携し、効率的に活動しているということを学んだ。様々な機関や人が関わることで、1か所で全部を抱え込むのではなくて、分担・協力することで、様々なアイデアを出し合い、専門的な知識や技能を持った人たちとつながることで、専門的な対応も可能となり、より良いプログラムや活動につなげていくことができる。

また、身体的・資金的負担を軽減できる。このように地域全体で発達障害、情緒障害、精神障害を抱える子ども達やその親を支援する体制作りをやっていきたいと考えている。まずは NPO の活動に参加し、NPO についての知識だけでなく現場での課題や運営について認識を高め、積極的に活動していきたい。また、職場での患者と研究者をつなげる研究支援活動やネットワークもまた NPO の活動に活かしていけると思うので、糧にしながら、次につなげていきたいと思っている。

JWLI 2013 年度 研修生募集要項

Japanese Women's Leadership Initiative

1ヶ月間のボストンでのNPOマネジメント、リーダーシップ研修

概要 社会に貢献する女性リーダーとして活躍する日本女性を支援するプロジェクトです。

この事業は、アメリカ・ボストン在住の日系フィランソロピスト(慈善事業家)が、母国日本の女性達のために立ち上げました。これからは女性リーダーが社会を支え、変化をもたらす大きな力となるはずであることは、世界でも日本でも同じです。このプロジェクトの目的に沿ってボストンでの研修を希望する女性を募集します。



JWLIの目的および研修内容:

以下の研修結果を生かして社会貢献活動に参加することを最終の目的とする。

- 1)社会に貢献する為の自分自身のヴィジョンを持ち、その実現のために必要な内面的な強さを 学ぶこと、そして研修終了まで に、帰国後の「アクション・プラン」を立てること
- 2)アメリカ社会で非営利組織(NPO)が果たす重要な役割や、NPO が政府や企業と協働し社会の変化をもたらしている事例を 学ぶこと。NPOの運営、資金調達のスキルを学ぶこと
- 3)JWLI 研修生が、帰国後、新しい世代の女性リーダーとして重要な役割を果たすと共に、後に続く女性達の支援をすること
- 4)JWLI フェローの卒業生として、研修経験からの知識を通して、日本の社会に変化をもたらすために努力し、後に続く女性達の支援をすること

研修期間: 2013年9月 9日(月) ~ 10月4日(金) (予定)

応募資格:

- 1)年令 28 才以上の日本女性
- 2)5 年以上の実社会での社会経験(非営利分野、 ビジネス分野、公的機関等を含む)を有する方
- 3)帰国後、確固たるヴィジョンと夢をもって社会貢献活動や、自らの社会活動に意欲をもつ方
- 4) 現地での実習に必要な英語力(コミュニケーション、レポートなど)を有する方

応募人数: 若干名(2011 年、2012 年は各 4 名) **応募(書類) 締め切り**: **2013** 年 **4** 月末日

- インタビュー5月25日前後にボストンの主催者が 来日し英語で実施されます。
- 選考結果は全員に6月初旬にメール予定。

必要書類:

- 1) 履歴書(英文及び日本文)
- 2) 英文エッセイ (A4で2~3ページ) 内容: ボストンで学びたいテーマとその理由及び 帰国後の具体的な社会貢献プラン
- 3) 英文推薦状 (A41 枚、推薦者 1 名・・・所属 する組織、会社、NGO/NPO等役員等の推薦)

その他: J1 ビザの取得が必要です

- 滞在期間中の、研修に関わる学費・宿泊費・ 食費・交通費・などは、支給されます。
- ボストンまでの旅費・ビザ取得のための費用 は自己負担となります

滞在期間:研修開始の前日~研修修了翌日

滞在場所:アメリカ合衆国ボストン

JWLI ボストン研修プログラムの内容、最終のスケジュール、応募方法などに関しては下記までメールにてお問い合わせください。

<u>jwli2013@bpw-japan.jp</u> (日本 BPW 連合会 JWLI 事業部 担当:櫻井啓子)

研修責任組織

- 米国・マサチューセッツ州ボストン シモンズ・カレッジ 担当者: Pro.Patricia Deyton (Director of Center for Gender in Organization Professor at Simmons College, School of Management) http://www.simmons.edu/centers/jwli/fellows-program.php
- 米国・マサチューセッツ州ボストン The Fish Family Foundation / フィッシュ・ファミリー財団 担当者: Atsuko Toko Fish (Trustee and Founder of JWLI), and Kozue Sawame (Program Manager)



特定非営利活動法人日本 BPW 連合会

2013年2月1日発行

〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-21-11 婦選会館 303 TEL03-5304-7874 FAX03-5304-7876 E-mail office@bpw-japan.jp URL http://www.bpw-japan.jp/